

357-279

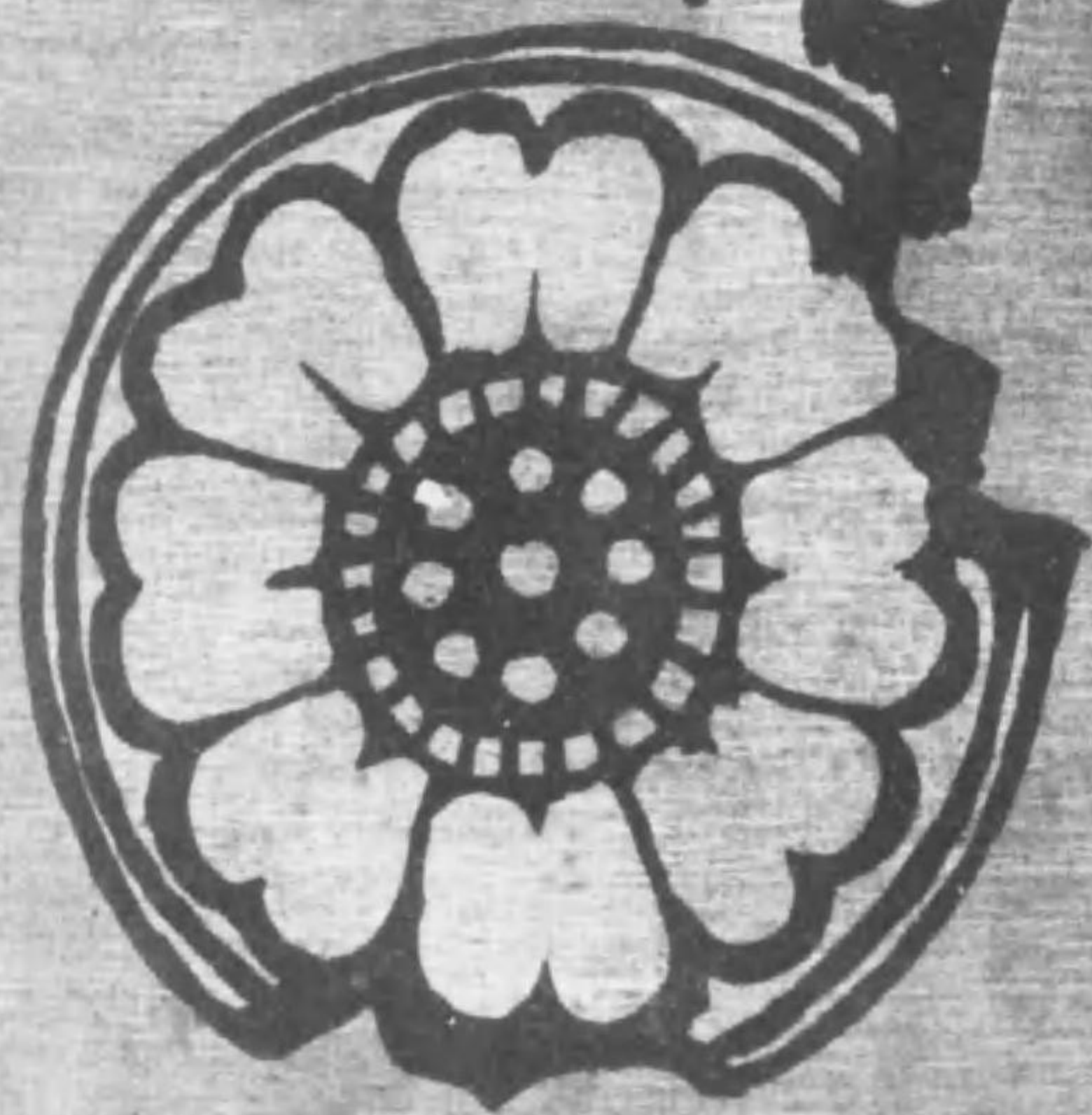


1200501411136

357

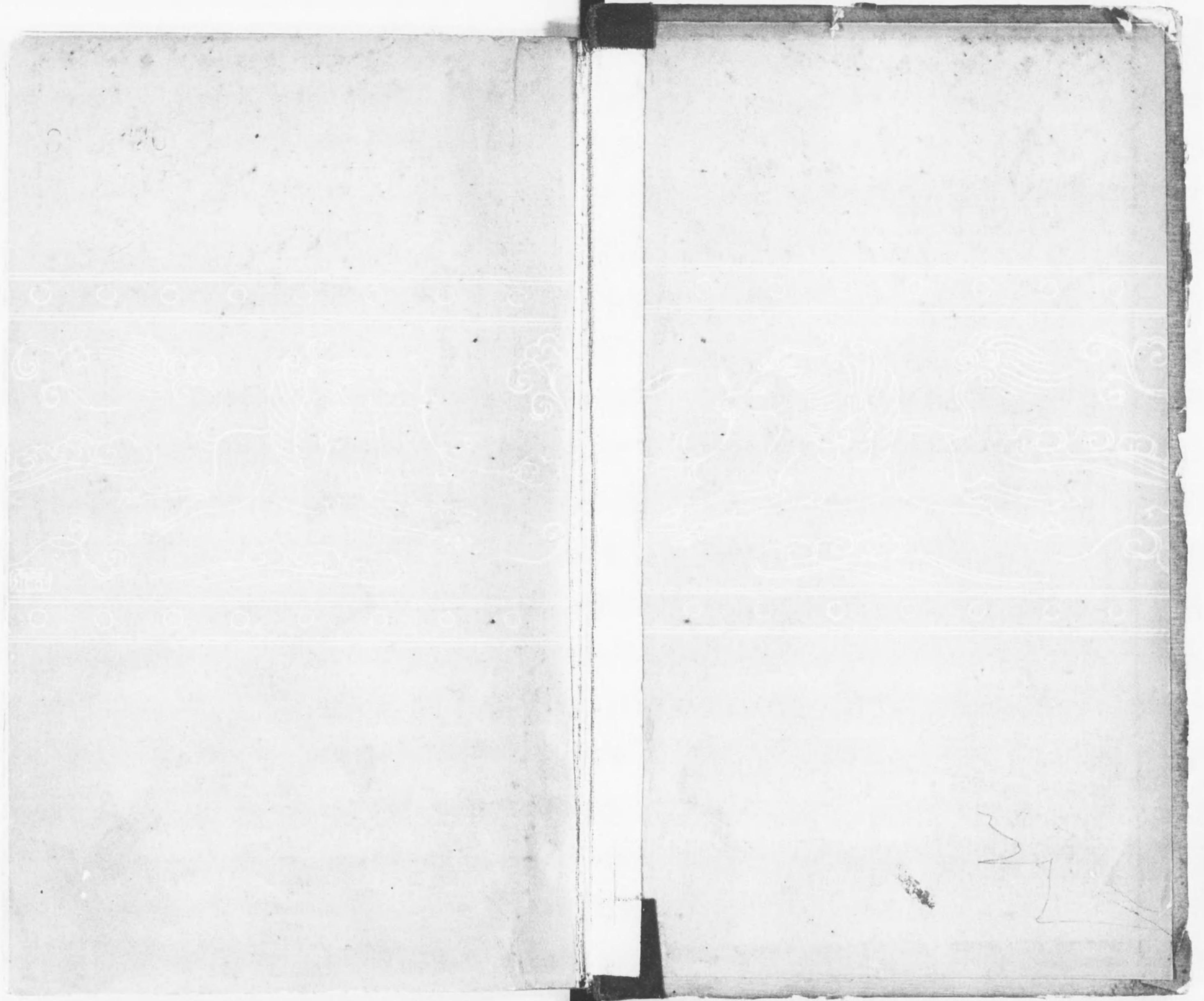
279

新
歌
ひ
ろ



始





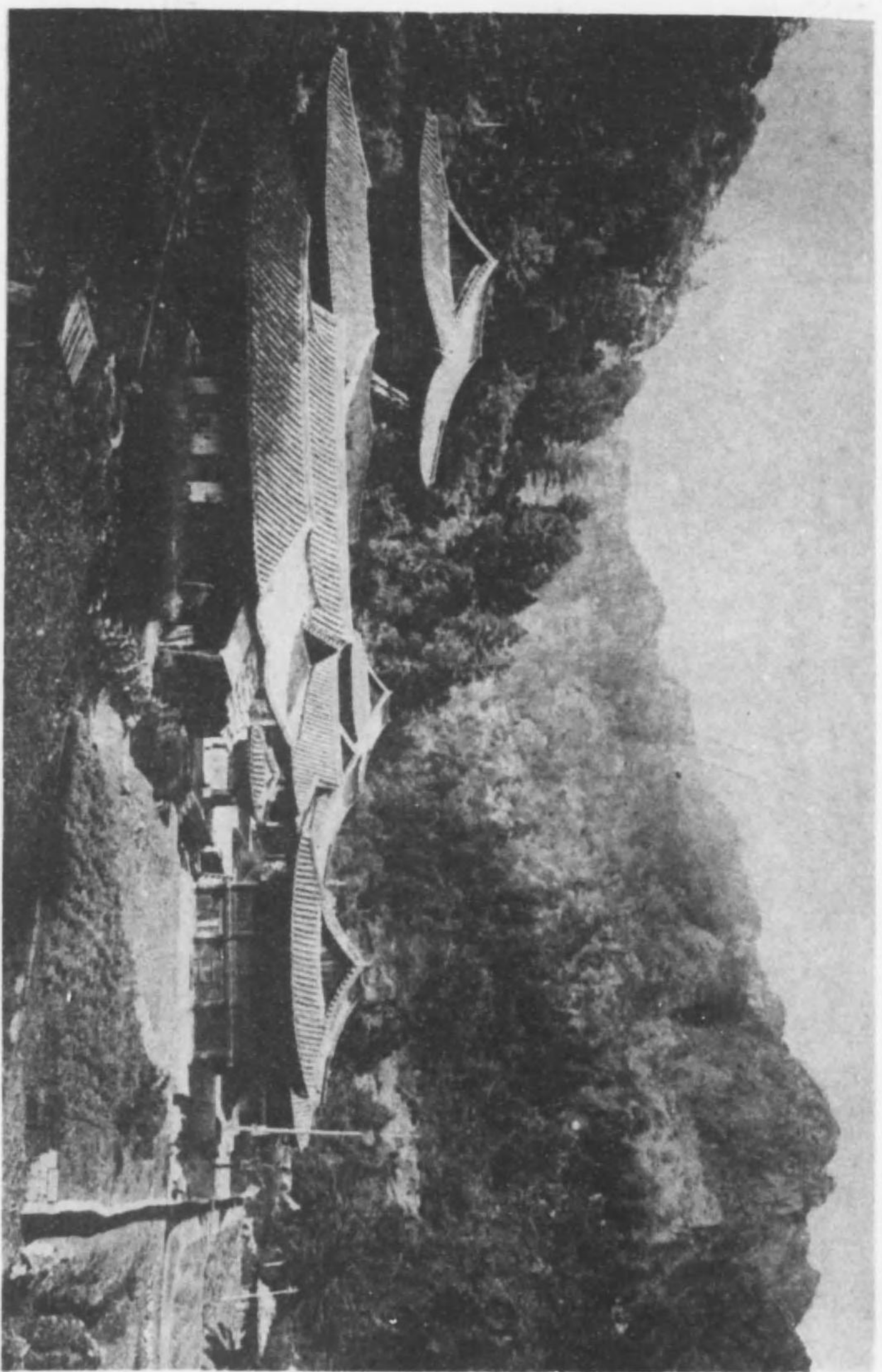


行
歌
き
ひ
つ
つ
し

京 東
行 發 閣 山 雄

士 博 學 文
著 舟 柴 上 尾





長安寺

357-279

行きつゝ歌ひつゝ

尾上柴舟

行きつゝ歌ひつゝ 目次

出發まで	一
連絡船	一〇
馬山に近く	二三
馬山	二六
慶州へ	四五
王陵	五九
慶州博物館	六五
佛國寺まで	七二
吐含山	八一
古陵古城	九
景福宮	一三
秘苑	二三
長安寺まで	三五

内金剛	一四八
温井里まで	一七三
外金剛	一九二
海金剛	二〇〇
叢石亭	二〇〇
碧蹄館	二〇三
開城	二四七
平壤	二五三
大連	二七二
小崗子	二八二
旅順まで	二八七
東鷄冠山	二九一
二百三高地	二九六
雨の奉天	三〇四

寫眞

北陵	三三二
ハルピンの夜(一)	三三五
ハルピンの夜(二)	三四四
松花江	三六一
安東	三七二
鴨綠江を上下して	三七九
馬關まで	三九〇
長安寺	口繪
朝鮮農村	三三
武烈王陵	六〇
佛國寺	七六
石窟庵石佛	九六
掛陵石獸	一〇〇



入して初めて渡る海なれば妻のためにも波
よ静まれ

出發まで

朝鮮海峽は廣くはない。

「下關を出て一眠りして醒めると、すぐ釜山の山が見えますよ。」
と朝鮮に馴れた細井魚袋君がいふ。なるほどさうであらう。が、舟に馴
れぬ自分には疑惧の念が起る。品川灣でさへ酔つた事もある。これが、四

勤政殿	二六
慶會樓	二〇
金剛山萬物相	一八四
叢石亭	三四
顯陵	二四八
滿月臺	二五
平壤大同江	二六八
東鷄冠山北堡壘	二九二
北陵	三六
ハルビンの支那街	三六

顧蒼茫として陸を見ないところに出ては、どうであらう。妻は自分よりは丈夫らしく見えるが、その時になつては、どうであるか分らない。

魚袋君は、自分のために日程を作つてくれ、それを印刷してくれ、方々へ照會をしてくれ、案内記だの、地圖だのと、旅行の必需品を整へてくれ、多忙の身でありながら、萬事萬端残るところなく周旋してくれられた。それのみならず、更に自分らと同行して見よう、といふ決心さへされた。

「京城だけにして、歸らうか。」

「序に、國境まで行つて見ませうか。」

「また出かけるのは面倒だから、思ひ切つて行つて見ようか。」

こんな問答を、殆んど毎日、妻として居た。かういふ事が面倒でもあつたが、また楽しみでもあつた。

「こんな返事が來ました。」

「こんな事を頼んで來ました。」

魚袋君が、やつて來ては、所々の報告をしてくれる。

新しい地圖を机の上に展げる。朝鮮史を読む。名所案内を見る。手紙を書く。ツーリストビュローに行く。其處の山中君の御世話になる。満鮮案内所や、滿鐵の本社などにも行く。忙がしい、しかも楽しい日が、どんどん過ぎる。

釜山から馬山、あとがへりして大連、横に外れて慶州、もとに歸つて京城、ここを本據として、仁川にも行く。更に金剛山を探つて元山に出る。立ち歸つて新義州に進む。鴨綠江を越えて、折角だから安東縣で、支那の一部を見よう、といふ計畫が出來上つた。

同じ事を繰り返して、妻と二人の日を過して來た。單調ではあるが、穩やかな楽しさがある。これも悪くはない。が、猶些かの變化はないか。思ふ

ところは去年と同じである。云ふところは昨日と變らない。同じくなく思ひたい、變つた考へ方をして見たい。

映り來よ知らぬ山川馴れ馴れておどろく事を
忘れたる眼に

驚くことを重ねて居れば、こゝに變つた自分が出來上つて來はしないか。それならば、今すこし先まで行つてはどうであらう。二度と行かれないのでないが、序ではあり、あまり日數のかゝらないことである。今すこし行かう。さうすれば、安東から奉天轉じて大連、旅順、立ち歸つて又奉天、それか

ら猶先に延ばす。乃ち長春、都合がつけば撫順、猶具合がよければ吉林、更にハルビン、そして歸りはまた奉天、安東、朝鮮を再び見つゝ釜山、東萊温泉で長旅の塵を一洗しよう。

生き生きとわれらは行かむ新しく強き刺激に
いらだちつゝも

雨が毎日降つてゐる。が、あちらはさうでもあるまい。

「随分暑いでせう。」

「埃がひどいだらう。」

かの國も今雨上りわれ待ちて黄なる埃の雲や
立つらむ

古りし身を新に還し知らぬ國塵と熱との中を
行かまし

古い自分が、生れ代つたやうになりたいものである。しかし、結果はどうであらう。

すべてが決定した。希望に燃える日と日とが續く。夢に入るものは高

梁であり、高塔である。黄瓦であり、飛檐である。濁つた大江である。禿げた連峯である。

遠くゐてこの東京をしのぶ日のあらむといま
だ思はれなくに

歩き廻つてゐる中に秋が来る。高粱畑に穂波が騒立ち、砂塵を揚いた風が静まり、古都の上に月が上り、大河の波に霧が流れ、廣原の草に露がきらめくやうになるであらう。その中を、自分らは行きに行かねばならぬであらう。

何故に遠く来つると悔ゆる日の出で来もやせ
む秋に入りなば

何時、愁思が起るかも知れぬ。しかし、今は何も考へられない。また考へ
たくもない。

雨が降りつゞく。昏濛の中に明けて暮れて行く。

「この雨でも御立ちになるのですか。」
「勿論立ちます。」

勇ましく快く夜の汽車の寢臺の上に、自分らは身を横たへた。

さし過ぐる枕の上の火ぞ多き今し車は國府津
を行くか

連絡船

宮島からさきは最初の旅行である自分に取つて、馬關といふ名は珍らしいものである。

停車場を出ると、大通の前面の比較的高い岡がある。新しく開鑿したらしく、赤土の色が惨ましい。神社があると見えて、石段が続いてゐる。町はその下に狭く連なつてゐるが、これが全部では勿論ない。本来の町は廣く左右いづれかに續いて廣がつてゐるのであらう。ホテルで朝食する。

快く砂糖の角の溶てゆく紅茶を見つゝものはおもはず

停車場に入つて待合室に腰を下す。内地人に交る鮮人の數は頗る多い。その白い服がまづ目に着く。

棧橋の端に、汽船が二隻横附になつてゐる。その一つに向つて、待合から出た群集が列を作つて少しづゝ動く。自分らもそれに従つて、やゝ暑い棧橋を進む。

仰ぎ見る舟の帆柱夏ふかき空を斜にさして太しも

上らむとしてふと見やる船の舳景福丸の名こそ
そ韓^{かん}めけ

同じ海越ゆと思へばうち並び船橋のぼる人に
ものいふ

部屋は聞いた通に美しい。腰を下すと給仕が茶を持って来る。續いて
脊廣服の人が、

「御洋行ですか。」
と云つて這入つて来る。洋行には相違ない。ただ釜山までの洋行であ
る。名刺を見ると、警察の人である。

「御苦勞様です。」
などと愛相を云ふ。人が少なくて、静かです。つかり書齋に居るやうな平
和な氣持である。

窓に見る晴れたる空に浮ける雲動きこそせね
舟は出づらし

舟の吐く棄水の音と波の音にまじるは錨捲く
音らしも

舟がすこしづゝ動き出す。舷側の波は眞白に湧き上つて、斜に一道の幅廣の堤を作る、と急速に下つて藍碧に流れてしまふ。酔ふといふ事が、一番怖ろしい。今まで、屢々それに逢つて、懲々してゐるのであるから、成るべく動かないやうにして、室の窓から外を眺めてゐる。

船のむき今しもかはる俄にも青き山見ゆ窓い
つばいに

何といふ島か。やゝ大きいのが前面に見える。それにすぐ近づきさうで、中々隙がかる。

「船の進行も、案外遅いものですな。」

「こゝはまだ海峡ですから、こんなのです。出れば、そりやあ早くなります。」と魚袋君が云ふ。

漸くにして島の傍を通る。人家もすこし見える。

「何といふ島でせう。」

「何ですか。六連島ともいふのでせうか。」

格別聞いて見ようとも思はない。

陸はおひく／＼遠くなるが、猶霞んだ岬が見える。

「あれは何處でせう。」

「山口縣の何處かですよ。」

「何處かですかね。」

「また何處か々見えますね。」

果と聞く岬のさきに山見えて盡きずもあるか
な大和島根は

黒く長い突角がまた見える。何とか名のあるところであらうとは思ふが、思ふよりは寐る方がいゝ。

「湯は湧いて居るのでせう。」

「丁度いゝさうです。」

早速這入ることにする。いゝ湯加減である。横になつて居ると、熱が快く身に融け込んで来る。すつかり、何處かのホテルに居るやうである。船

の旅も、こんなものかと思ふともつとく遠方に行つて見たい、と一層呑氣になる。

自分が出て、妻が這入り、妻が出て、魚袋君が這入る。出て来てみんないゝ氣持だ。」といふ。魚袋君は次の部屋に行つて寝るといふ。自分らも、すぐ寢臺に上る。船酔ひの特效薬とも云ふべき薬を、出立の時、南博士から貰つて居るので、取り出して水を割つて呑む。

外面には、暴風雨のやうな音がする。船の浪を切る響である。すつかり二百十日、二十日の様子である。陸では雨戸の響がとゞき、家の震動が伴ふのであるが、窓から見える天は眞青であり、身に感じる動揺もない。却つて子守歌でも聞いてゐるやうな氣分になつて、いつしかうとくとする。

「對馬が見えて來ました。」
と魚袋君が起しに來る。

「此處からですか。」

「いえ、上の甲板に出なければなりません。」

上らうか、上れば酔ふかも知れぬ。まあ止めておかう。斷つて目を閉ぢる。またうとくとする。日本海々戦の事がふと心に浮ぶ。第三艦隊司令長官であつた故片岡大將の顔が現はれる。

「自分らは、露艦隊をひきよせるために、餌になつて居たのです。」

と今はこれも亡き人となつた父が、戦争談を聞きながら話し込んで行くと笑ひながら大將の答へられた語まで思ひ出される。あの柔らかな、温厚な人が、よく大軍を指揮して叱咤號令せられたものである。この人が亡くなられて年が経つたかと思ふと、それもこれも夢である。やがて自分のかやうに安易な航海をして居るのも、また夢となる時が来るであらう。

目が醒めると、晝食の時はすでにく過ぎて居る。起きるのが面倒なの

と、空腹を感じないので、まだ横になつて居る。魚袋君も起しに來ない。向うの寢臺で、妻も安らかに眠つてゐる。

をりくりに顔上げみればよく寝たる妻の面に
惱あらざり

大海の波外面にはとゞろけどよく寝る人に部
屋は静けし

案内記を読みながら、またうとくとする。

大海のまなかに浮くと誰れか思ふ家よりもな
ほ心安きに

寢臺を下りて、一寸窓から覗いて見る。確かに海の真中である。山も、島も何も見えない。たゞ青黒い重さうな色が、處々午後の日光を受けて、白く反射してゐる。そのみに浪がある。空に近いところには、折れ返るのが著しく見える。あの邊を通れば、このやうに氣樂にしては居られないであらうか。

しかし、猶前が急がれる。早く釜山が見えればいゝ。この船から早く下

つて、朝鮮の土を履みたい。いや馬山を見たい。慶州を見たい。京城を見たい。鴨綠江を渡りたい。大連を、旅順を、そして奉天を、長春を、ハルピンを。考へ續けると、前のみが急がれる。旅行好の父が、停車場では停車場を樂しみ、汽車では汽車を樂しみ、車では車を樂しみ、宿屋では宿屋を樂しんで、眞に旅行を剽那的に享樂しつゝ、悠揚として進んだ氣分は、遂に自分には傳へられなかつたのである。

もの皆をよしと定めて笑まひゐし父はたのし
き人なりしかな

馬山に近く

「釜山に近いところが、一番荒い。」といふことを聞いて居るので、寢臺にゐるまゝで頭を上げない。寝ながら案内記を読みつゞけてゐる。が別に波が荒くもならない。

「もう港が見えます。」

と魚袋君が隣室から来て注意する。起きて見る。なるほど、前面に山が見える。

「朝鮮の山は赤禿だといふが、さうでもないぢやないですか。」

「もとはさうであつたのですが、今は木が繁つて青くなつたのです。」

「すぐ前に見えるのは、絶影島ですか。」

と案内記を暗記したのでいふ。

「さうです。あれの向うに、釜山の町があるのです。」
變な柱のやうな赤い岩が數々見える。内地では見えさうもないものである。「五つにも、六つにも見えるので、五六島といふのだ。」と後から聞いた。

夕照のつよき光をもてあそび越え來し海の波
ぞ躍れる

島を廻つて船は進む。埠頭が正面に見える。

「出迎が澤山ありさうですよ。」

と魚袋君がいふ。なるほど棧橋に立つた人影が多い。が、中々船は著か

ぬ。あちらでも待ちくたびれるであらう。此方でももどかしい。

動くとも船は見えす我と人隔つる波はいま
だ多しも

やつと船が横附になる。下りるのに手間がかゝる。顔は上と下とでよく見えながら、中々近づけない。

遂に下船する。歓迎の辭が多くの人々から發せられる。自分のために、かやうに大勢と思へば、胸がいつぱいになる。

白衣の連中は内地でも見た。が「ちげ」を脊負つた形を初めて見る。これ

だけが朝鮮氣分で、町は内地そのまゝである。

ホテルで休む。船ぎらひな自分が、安全に海を越し得たといふ安心で、飲むシトロンもことに旨い。金剛山を畫いた油繪の額を仰ぎつゝ、あれに行くのも近いことだ、と心が躍る。

京城から遙々来てくれた井上君、特に出迎へてくれた伊達警察部長に別を告げて、馬山から迎に出てくれた久保君、吉開さんの案内で、馬山に向ふこととする。

階段を履んで乗る汽車も珍らしい。廣軌で室の幅の廣いのが、特にうれしい。蠟燭臺の備へてあるのも妙だ。最後の車に入つたので、展望がよく利く。

港を離れて、暫くすると、日はすつかり暮れた。道は兩山の間になる。山の黒さは深い。その中央に、明らかな光が満ちて来る。

山近うなればいよ／＼立ちまさる霧の底より
月浮び來つ

月は光を加へつゝ、右から車の左に轉ずる。畑のひろがりが見えだす。霧が白うその果に靡いてゐる。内地そのまゝの山が、その向に連なつてゐる。まだ朝鮮らしい感じがな

い。一層黒い畑が來る。果樹園だといふ。月はその木の間木の間を明るく
見せる。

と月光が急に擴がる。廣い水に照り初めたのである。洛東江である。

果樹園の上をまろびて大きき月大江の水に移り
たるかな

月のうつり具合で見ると、よほどの大河である。激澗とした波光は、車の
走るとともに動いて果てしがない。

車は轉じて、また山に添ひ、野を貫いて走る。月はますます清い。
海が見え出す。こゝにも月が映つてゐる。影は一層廣い。馬山が近く
なつた。

馬山

遅い晚餐の箸を取りながら、欄干越しに海を見る。

前面の山はやゝ近く迫まつてゐる。右手のは少し遠く離れてゐる。岬が突如として出てゐる。その内側は更に深い灣を作つてゐるのであらう。その向の山は遠く薄く見える。その向に、猶連互してゐる山が見える。それが、右に左に重なり重なつて、幾多の灣を抱き、また灣を作つてゐる。かくして鎮海灣まで續くのであらう。左手の山も、同じやうに高く低く遠く近く連なつて、幾處にも、灣を作つてゐるやうである。

山は、遠いのは霧の白いのをかづき、近いのは木立の黒いのを載いてゐるが、いづれも、なだらかな傾斜を以て、ゆつたりとした影を、水に浸してゐる。灣の水はさゞ波しか持たない。山の影の映つたところばかりは著しく

暗いが、中天になつた月影をいつばいに反映したところは、水銀を流したやうに明るい。目を轉ずると、轉ずるまゝに揺らぎながら、光は移動する。箸を置いて、欄干に凭れる、椅子にかける、座敷に座る。何處にあつても、水上の月は、伴なつて輝く。

夜は次第に更けて行く。町の人は眠つたらしい。どの家も戸を閉めてゐる。しかし、灣に面した窓を明けて、自分らと同じく光を受してゐる人もあるであらう。

山かけの深き入江の波なきにうつり静まる夜
半の月かな

「どうも、いゝ月ですな。」

「こんな景色の處で、こんな月夜に逢はうなんて、思はない事です。」

「明石あたりよりも、向うの山が低いので、却つていゝですな。あそこは淡路島があまり高く大き過ぎて、大味な感じがありますな。」

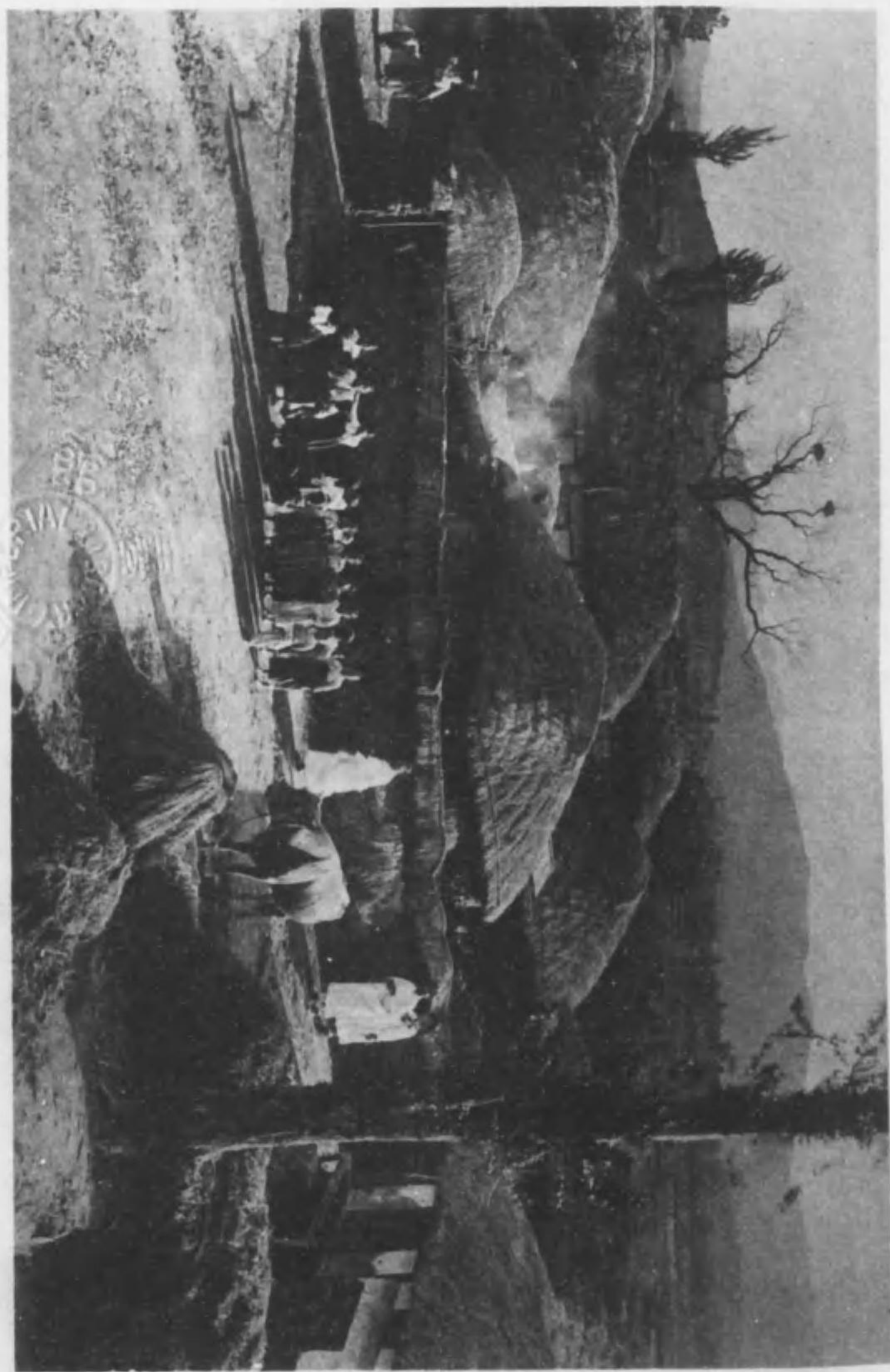
「海岸に松のないのもいゝ。水に照る月を見るのには、却つて邪魔になつていけない。」

などと云ひ合ふ。すこし冷やかになる。が、まだ寝ようといふ氣は起らない。月はいよゝ／＼澄んで、西と思ふ方へ傾く。その邊の山の頂近く、霧が濃く見え出す。斜になつた光は、前よりも廣い幅を以て、水の上を照らす。風がすこし出たらしい。波が端だつて動く。と光は揺れに揺れる。散る、集まる、また散る、また集まる。

「見てゐては果しがない。寝るとしよう。」
なごり惜しく、更に月を見る。

湧き来るは堪へざる愁月かけの身にしむばかり眺めて居れば

朝の光がかゞやかしくさし込むので、目が醒めた。蚊帳を出て昨夜の月のかゝつた山を眺める。夜の黒かつたのに引きかへて、今朝の緑の深いのはいかにもすが／＼しい。曲折の豊かな灣の水は、些かの波をもつて、靜かに隅々まで光つて居る。



朝鮮農村

水すでに秋なる色にあらはるゝ朝の入江は行く舟もなし

裏の窓から見出すと、そこは高い木草の山である。處々に大きな岩が見える。朝鮮家屋が點々として居る。葺が生えたやうにも見える。

屋根に来て啼く鳥がある。白い腹を見せては下りて来て、また上る。その度に青黒い翼や尾がひらくとする。繪によく見る鵲である。鳥よりもいゝ姿をしてゐる。鳥のかはりにこれが居る朝鮮は、恵まれた土地であると思ふ。

府尹の板垣氏が来られる。大隊へ案内しようといはれるので、昨夜の久保君も一緒に出発する。雨が涼しく一過する。溝に添うて自動車が駛走する。

「この邊にはこんなに竹があります。北に行くと、すっかりなくなります。と些かな竹藪をさして、板垣氏が言はれる。」

「この邊には虎はゐないでせう。」

「こゝには居ません。北の方に行けば居るのです。」

「さうすると、竹に虎といふのは嘘になりますな。」

「さうです。虎の居るところには、竹がなくなるのですから。」

大隊長の八木原大佐が出迎へられる。庭上にテーブルを並べたところに案内せられる。

庭には櫻や他の大樹の葉が密生して居るので、たゞ少しく日光が漏れる。

見下すと灣の形が變つて居る。今までは横に見たのを、此處からは豎に見る。右側は突兀とした山に遮られて居るが、左側は却つて遙かに灣から灣が連なつて見える。水から上つて來る風が涼しく襟を吹く。

正午^{ひる}近き光を揺りて吹く風にきらめき強き入
海の波

「兵は面白いことを云ひます。あの向うの山は名がないのですが、目標にする時に「鯛の口山に向つて」などゝやつてをります。」

といふ大隊長の語に氣附いて見る。成るほど突兀としてゐる山頂は、ふ

くらみをもつて一高し、鋭く斜に一低し、更に鋭く斜に一高し、またふくらみをもつて一低してゐる。齒こそ見えないが、すっかり鯛の開いた口そのままである。

「今夜もまたいゝ月でせうから、舟で灣内を御案内いたしませう。」

大隊長の好意を謝しつゝ、其處を出る。すぐ車は山を上り初める。幾曲折すると、府尹の官舎が見える。夫人が出迎へられる。上つて座敷から見ると、灣は、また趣が變つてゐる。

「これだから、此の地は離れにくいのです。」

「こゝが内地でいへば、須磨、明石にも當りませう。朝鮮第一の健康地ですから。北に行つては、何處にもこんないゝところはありません。」

「港としての價値は落ちたし、商業として見るべきものはありませんが、この景色、この空氣ですから。」



馬山は、もはや繁昌しないところである。しかし、それは商業地としての事であつて、風景には一切關しない。府尹の誇稱は決して誇稱ではない。車はまた町に向つて走る。日本人町を離れて、鮮人群居のところに来る。舊馬山である。

狭い道の兩側に、家は櫛比してゐる。往來の人数も多い。簞笥屋の、重ね上げた簞笥の青貝のきら／＼としたのが、まづ目につく。

道の傍に、井らしいのが見える。

「これが蒙古井といふのです。元の連中が日本征伐に來た時、こゝを根據とした時、鑿つたといふのです。」

久保君が説明する。實とすれば、眞に古い井である。蒙古の連中は、日本を一氣に片づけること、水を呑むと同様に思つたであらう。

前面に一帶の丘陵が見え出す。幅の廣い石垣が高く峙つ。

「あれは古城趾です。征韓の役の時に、日本軍が築いたものださうです。」
「すつかり日本流ですな。本丸だの、二の丸だの、構もあるのですか。」
「上つて見ると、すつかりあります。時間があれば行けるのですが。」
「一時的でない、少なくとも半永久的築造と見える。」

鬼おにの顔け獸けものの頭かぶ國人こじんを恐れしめつゝ守りけむ武ぶ夫おとこ

頬當や前立や、鬼と獸とを連想させる武装は、甚だ異様に鮮人に見えたといふことである。

日が暮れて海岸に出る。棧橋から廻つて来た舟に乗り込む。
大隊長が快淵に話される。

「この灣は御存じの通、鎮海灣まで續いて居ます。曲折が多いので、その灣内は、よほど廣いのです。」

「その邊までは行かれませんか。」

「行けない事ありませんが、歸の時間がありますから、その近邊までは行けませう」

船はすん／＼進む。月が現はれて、光を波の上に投げる。淡い雲が出て、をりをり朦朧にするのも風情がある。山は近いが、たゞ黒く見える。

「今通つた島を猪島といふのですが、珍らしい傳説も出來て居ます。御存じでせう。」

「案内記で讀んだのですが、中々うまく出來て居ますな。」

「形が猪に似てゐるからつけたのでせう。」

「内地では、牛島とでも云ふのでせう。」

月が澄んで来る。

海に滿つ光の中の一黠と山より舟を見る子

あらずや

山の形が様々に變ると、月のさし方も異なつて来る。陰と光と、巧みな交錯を見せる。舟はよく駛る。舷側の波の響も快いので、おのづから話もは

づむ。

「隊に居る時、ある宮殿下も御一緒でしたが、『御前が司令官になると、陛下が御笑ひになるだらう。』なぜでございませうか。』だつて、太郎作ではないか。臣太郎作と申しあげると、御笑ひになるに相違ない。』など、仰せられました。『太郎作』は、自分ながら妙でないですな。」

大隊長は、太郎作と云ふのである。

「私の『尾上』も、『八郎』も、かなり妙です。先年正月に東京驛で、荷物を受取らうとすると、『今年初の興行はどちらですか。』など、聞かれたのですから。」

など云つて笑ふ。

競ひつゝ、舟と走らふ端きばだちて月に光れる一筋の波

かの陰に街やかくるゝ間深き山のみ空のすこしく赤き

「あれが鎮海ですか。」

「市街にしては、あまり火が多くありませんか。」

「こゝからはあの位ですが、まだく澤山見えるのです。」

「今はよほど衰微したといふのですが、ほんたうですな。」

「今は軍港でないものですから、自然衰微しました。でもまだく人口は

少なくともありません。」

「大海戦の前に鎮海に隠れて射撃の演習をして、並航戦ならば必ず勝つ、といふ確信を得たといふやうに聞いてをりますが。事實でせうな。」

「全くさうなのです。灣内から出ては、射撃を猛烈に練習したのです。」

「それにしても、よく大艦隊が這入れたものですな。」

「こゝから見ると、極近くで見るとは違つて、灣の屈曲が十分に隠し得たのです。」

「海戦のすぐあとで、『ある海軍の人に来て話してもらふが、関係者のみにかぎるから出て来い、』といふ通知を貰ひました。ほんとの萬障繰合で、行つて見ると、手に取るやうな話し振で、佳境に入ると、話し手も昂奮し、聴衆も感激しました。私ももとよりその一人で、話にすっかり魅せられてゐたのでしたが、終になつて、『かやうに御話はしましたが、私は戦闘

に参加したのではありません。」といはれたので、大きくかつがれたやうな氣持で、失望してしまひました。後で考へれば、戦争直後に歸京して、講演するといふほど、閑な人もなかつた筈でしたから。

「そんな事は方々にあつたでせう。戦争に参加してゐては、すぐ歸れませんから。」

廻りつゝ舟傾けば傾きて月も山べに近くなりぬる

今度は、月に背いて歸りかける。光を受ける山々に並んで駛る。岨の木

立の間もはつきりしてゐる。ところ／＼白い霧が動く。夜が更けたのである。風がやゝつめたくなつて來た。

「こゝから見ると、馬山も中々立派なものでせう。」

はや馬山が見え出した。岸から山にかけて、數多の燈火が連なつて居る。丁度、魚見崎邊から熱海の町を見るやうである。

「これが、衰微したといふのは嘘のやうですな。」

今更ながら人々が褒めそやす。こゝの人々は、嬉しさうに笑ふ。埠頭の燈が近づいた。

慶州へ

奈良を見に行くといふ氣持が起る。新羅の古都の慶州は、奈良よりも猶古い歴史を持つてゐる。

「朝鮮へ行つて、慶州を見ないといふことはない。」

とは屢云はれたことであつた。「必ず見よう。少々の障害は排除して、きつと見に行かう。」東京を出る時から、この決心は堅かつた。その慶州へ今向ふのである。

大邱ではじめて朝鮮の風俗をやゝよく見た。釜山ですで見、馬山でまた見たのであつたが、それは單に瞥見したに過ぎなかつた。大邱で、各處から藥を持ち寄つて開く市場を見た。達城公園で、散歩する多くの人を見、外圍に上つて、四周の草舎民屋をつく／＼見た。洗濯場によつて、婦人連の

白衣を洗ふ様をよく見て、寫眞さへも取つた。それで、やゝ通じるところがあつたのである。

しかし、それらは現時の朝鮮のそれである。更に古く、また大いに古く、過去に於いて、内地と密接の關係を持つてゐたその時々、朝鮮を見、また知ることには出来ない。それを見ようと思ひ、知らうと思ふのは、必ず慶州に向はねばならぬ、奈良よりも古い都の慶州に行かねばならぬ。

大邱を離れた車は、大きな川の橋を渡る。

「大邱の人は、こゝまで涼みに來るのです。」

と運轉手は云ふ。水はさほど多くないが、なるほど涼しさうである。

川を越して野に出た車は、白い一路を眞直に走る。實に坦途である。並樹が、兩傍に限も知らず連なつてゐる。その中を、砥の如き一筋が、何處をばてともなく續いてゐる。

車もいゝ、路もいゝ。運轉も上手である。動搖はなくして、外圍が變る。並樹が流れる。草屋が走る。人が飛ぶ。馬が駈ける。をりく山が動く。野が移る。

地につかで走る車かアカシヤのポプラの道の
音も立てなく

と緩やかではあるが、谷に陥る氣持がする。

「今のは何ですか。」

「あれは川です。」

「川の上を走るのですか。」

「さうです。雨の時に急に水が出るものですから、その排水に道に凹みが作つてあるのです。つまり川が出来てゐるのです。これから所々にあります。」

注意して見て居ると、なるほど川が出来てゐる。兩方が畑である。それに雨水がたまふ。一方の高い畑から、一方の低い畑にそれを流すべく、平素からコンクリート製の緩い傾斜の凹が用意してある。つまり豫備の川が出来てゐる。内地ならば橋—水無橋—を架けてあるところである。その凹處に、車が滑り込んでまた駈け上る。

「雨の時は、その新出来川の中を車が駈け通るのですか。」

「さうです。人もそこをさぶく／＼と渡る譯ですが、水は出たと思ふとすぐ引きますから、さして苦にならないのです。」

と聞いてゐる間に、またすつと車が滑り込み、またすつと走り出して行く。

「真直な道に、これが變化を與へていゝぢやありませんか。」

車の内は風が流れ込むので涼しいが、外面は日がかん／＼と照つて、よほど暑さうである。行くも来るも稀ではあるが、その人々は汗を垂らして、眞赤な顔をしてゐる。行き疲れたのか、並樹の下のすこしの蔭をたよつて、長と寝そべつてゐるものもある。

「よく土の上にぢかに寝られるものですか。」

「蟲が這ひ上ることです。」

「土が乾き切つて、蟲もゐないのでせうか。」

「自動車の埃を被つても平氣なのは、どうしたのでせう。」

「内地では行仆れとしか認められませんか。」

と口々に云ふ。

アカシヤ、ポプラの並樹は鬱蒼として、眞直な乾いた道に濃い蔭を作つてゐる。

亂れあひ崩れあひては過ぎてゆく車の窓のアカシヤの影

果樹園が続いて見える。
立派な林檎が、まだ青いが緑葉の間に澤山小さい顔を出してゐる。「大邱林檎は世界一。」と書いてあつたのは、こゝの事なのであらう。
車はいよ／＼疾駆する。窓に入る風は愉快に面を打つ。青い山が送り

迎へる。

「この邊の山はいゝ色ではないですか。」

「アカシヤを澤山植ゑてあるからです。」

「急劇に山を青くするのは、これに限るのですからな。」
と急に車が止まる。何かと見出すと、意外にも、大きな河が、車の前に漲つてゐる。

「どうしたのですか。」

「急な出水です。」

「渡れないでせうか。」

「どうも渡れさうもありません。車ばかりならば、どうかなるでせう。」
みんな下りることにする。

岸に出て見ると、川は五間位もあらうか。濁つた水が瀬枕をうつて流れ

てゐる。橋も何もない。車だけ渡るとしても自分らはどうなるであらうか。

「そこの鮮人に負れて御渡りなさい。」

見ると岸に出てゐる多くの鮮人はたゞの見物ではない。通行人や荷物を負うて向岸に渡して、多少の錢を得ようといふのであるらしい。

「あのハイカラな、白チョッキを著て居るのが綺麗ですから、負つて貰ひませう。」

招くとすぐに来る。順々にみんな渡してもらう。滑りもせず安全に向岸に著くと、來かゝる自動車がある。運轉手が下りて、聲を自分らにかける。

「まだ一つ向うにこんなのがありますよ。」

「渡れないほどですか。」

「いやだん／＼に減水するでせう。」

と云ひつゝ、自動車を濁水中に走り込ませる。水は大しぶきを揚げる。白い簪を廻すやうに車輪は急廻轉をする。傾きつゝ走りつゝ、車が向岸に上ると、今度は自分らの車が、大象の大海を渡るといふ有様で、また大波を立てつゝ此方に向つて馳せて来る。やつと岸に上る。待受けて自分らが乗る。この騒ぎを、高い土堤の上で長煙管をくはへつゝ、悠々と見るが如く見ぬが如く、踞座してゐる兩三人がある。

「よくあゝ澄ましてゐられるものですか。」

「あゝいふのが仙人になれるのでせう。」

一部落が見えて来る。反つた櫓の堂々たる家も交つて見える。永川といふのである。驚いて見てゐる子供らを後にして、車は町中を馳せ通る。

「こゝが慶州までの一番の都會です。」

「加藤清正も、慶州からこの町を通つて大邱へ出たのです。」

「随分荒らした事でせう。」

「さうではなくつて、荒らしたのは、却つて明兵だといふ事です。」

この邊にまた出来たばかりの川があるのかも、一度負はれて渡らねばならないのか、と悲觀しつゝ來るとなるほど道を横切つて、一道の川が流れてゐる。が、すでに減水したと見えて、驚くほどの激流ではない。車はずんずんと走り込んで、直ちに向岸に上る。

「またかと思つたら、案外でしたね。」

「朝鮮の川はこんなものです。御歸に御覽なさい。たゞの川原になつてゐますから。」

野が遙々と開けて來る。うつすりとかゝつた霧の中に、ポプラの二三本が浮いて見える。大きな静かな川が道の左に流れてゐる。道は山腹に傍つて曲折しつゝ、川と離れずに走る。

向伏せるみ空の色もみどりなるこの廣原の夏
はしたしも

「綺麗な川ではありませんか。」

「永湖江とか云ふのです。」

「川もいゝが、川向の平野もいゝですな。處々大きなポプラがあるのは、すつかり洋畫ではないですか。」

「あの平野の中に、古くから住んでゐる内地人があつて、今では大した財産家ださうです。」

川中にところ／＼石が置いてある。

「あれは何ですか。」

「向に渡るしるしになるのです。」

と云ふと、此方から渡りかける白衣の人がある。

浸りつゝ動く踵くびすの白ささへ透りて見ゆる水の
涼しさ

車から下りて見渡す。一帯の青みに満ちた平野の向に、穩やかに重なつた山の姿が、霧の上にくつきりと浮んで見える。白衣の人は石をしるしに、

浅瀬の上をゆる／＼と踏んで行く。水が細かな綾を織つて、倒さに映る影を亂してゐる。遂に渡り了つて、芝の上に立つて此方をふり仰ぐ。

渡りをへて草にぬぐへる足うらのほてりを
お
もふ夏の浅川

再び車に上つて疾駆する。丸い茂みが、近い山の上に處々見え出す。

「あれが皆墓ですよ。」

「あんなに方々にあるのですか。」

「これからますます見えて來ます。」

青田の間に一旒の旗が見える。その邊に集まつて、何かしてゐる一群がある。

「あれは。」

「勸農旗といふさうです。あの旗を立て、近邊の人が手傳ひに出るといふのです。鼓を打つて興を添へることもあります。」

「昔の田樂と同じ意味ですな。」

墓はいよ／＼多くなる。古都といふ感じが次第に強くなる。すでに慶州に近づいたのである。と、疾駆した車が急にとまった。

王 陵

「こゝが武烈王陵です。」

と運轉手がいふ。武烈王——新羅の國力を極度に進展せしめた英主、唐の力を借つて、世讎の百濟を亡ぼし、更に日本の勢力を半島から驅逐した明王、その陵の前に自分は來たのである。

車を下りて、厚い高麗芝の緑を履む。道の左に、こんもりと高い圓墳が、それである。その後にも、おなじやうでやゝ低いのが連なつてゐる。陵の前に到つて一拜する。松の風が颯と音を立てる。芝の末にかすかな靡きが見える。

その日より生ひつゞくらむ墳の上の草一もと
に如かしが人は

左によつたところに、碑石が立つてゐる。行つて見ると、碑はすでに無い。
下の龜趺と、上の螭首とが残つて、螭首が龜趺の上にちやんと載つてゐる。
螭首は六匹の龍が蟠屈して、寶珠を捧げる様をしてゐる。

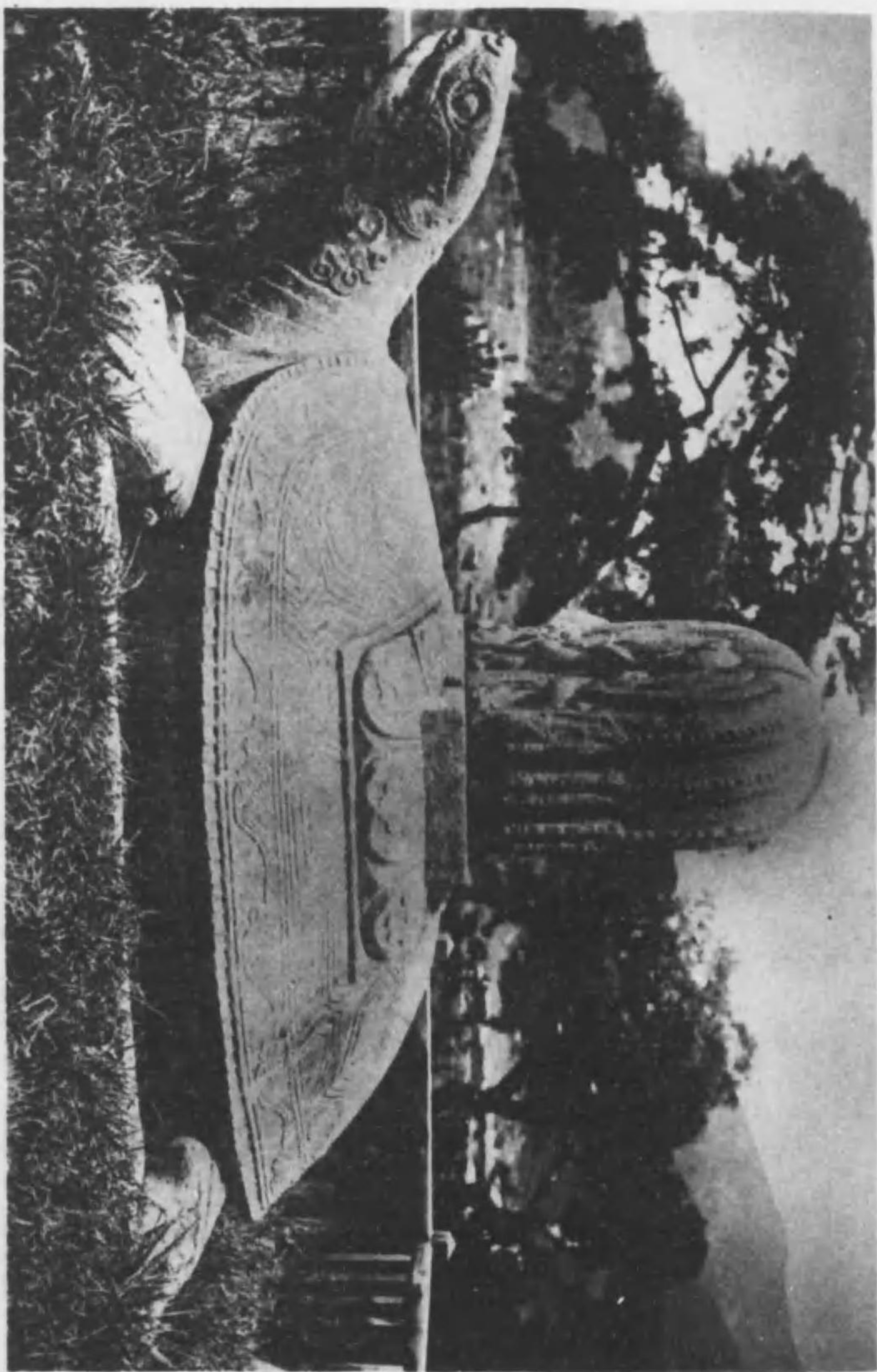
「どうです、一匹一匹生きてゐるやうではありませんか。」

「鱗の具合も、頭の様子も、實物でも見るやうですな。」

「初唐の精髓を、そのまま傳へてゐるといふ事です。」

なるほど、寫眞で見た初唐の碑の螭首の龍とよく似てゐる。

龜趺は長方形の基石の上にあつて、甚だ大きい。背には無論龜甲文があ



武陵王陵

り、その真中に蓮座が出来てゐて、碑を受けるやうになつてゐる。しかし今は、こゝに蜻首が載つてゐるのである。

「この龜の顔もいゝですな。」

「この頭から頸の邊も生きてゐるとしか思へません。」

「これも唐の眞似をしたのでせうが、よく出来てゐますね。」

蜻首の真中に、「太宗武烈大王之碑」の八字が二行に刻られて、結構の妙のみでなく、全體に生氣の充實してゐるのは、驚くべきである。

道を隔てゝまた一つの土墳が立つてゐる。こゝにも、龜趺が草の中に這つてゐる。金湯の墓であるといふ。金湯は神武王を擁立した功臣ださうである。

やはらかう手にこそ通へ撫でて見る龜のかし
らに残るぬくみは

野を隔て、一條の川が流れてゐると見えて、堤の松原らしいのがある。
その向に、また例の旗が立つてゐる。そこに人の群がりがある。鼓の音が、
風に連れて微かに傳はつて来る。

「音楽をやつてゐますね。」

「あれで、農事が樂々出来るのですから、愉快ではありませんか。」

「世が變つても、良い風俗がいつまでも残つてゐるのは、嬉しいではない
ですか。」

英主と名臣との墓を背にして、この古風な樂の響を聞く。

草にゐて遠きひゞきを聞き澄ますうしろに起
る松風のおと

再び乗つた車は慶州の町に入る。町は意外に小さい。全衢一千三百坊、
民戸十七萬八千餘の有様は、何處にも見られない。たゞ板屋草舎の連なり
である。

鳳凰臺、金冠塚などといふ名が見える。金冠の出たといふ金冠塚、早くそ
の金冠を見たいものである。

車はその間を馳せて旅館に著く。さつぱりとした座敷に通る。膳が出

る。

「この銀の形は少し變ですね。」

「いやに、三角になつてゐるではないですか。」

「迎日灣方面のはこんなのでせうか。」

などいひあふが、例の香氣で別に聞き訂しもしない。小松の緑の濃い庭に向つて、箸を上げる。

慶州博物館

「御待ちしてゐました。」

と館長諸鹿氏が挨拶せられる。名ばかり聞いてゆかしがつてゐた慶州博物館―詳しく云へば、朝鮮總督府博物館慶州分館―に、自分らは來たのである。

屋根は反つてゐる。柱は丹く塗つてある。門を入るとすぐに、石像や、石塔の奇古なのがある。佛像中には、推古佛に似たのさへある。これで、すでに懐古の情を漲らせつゝ、玄關を上つたのである。

館長の案内で各室を見巡る。まづ石器時代のものが陳べられてある。土器と、陶器とがある。新羅時代の骨壺には目が惹かれる。古瓦の、文様の種々なのは殊に心が駭かされる。その文様の蓮華唐草にも、複雑なのが

ある。蓮華は華の上に更に華が加はつてゐる。そのみでなく龍があり、伽陵頻伽がある。その線條は力をもちつゝ、緻繞として、著しく優美である。埴も美しいのがある。これを履みつゝ、衣冠の端正なのが通つたと思ふと、心はおのづから新羅の最盛時に馳せる。

敷き詰めし瑠璃をすべりて軽き靴輕き裳裾や

音なかりけむ

「どれも立派なものばかりですね。」

感嘆の聲を放ちつゝ、館長の後に従つて庭に出る。巨鐘が前に現はれる。

「これが奉徳寺の鐘です。小兒を一人鑄壺へ投げ込んだので、始めて出来たといふのです。」

孝成王が父聖徳王のために奉徳寺を建てた。これに次いだ弟の景德王は、それに加へて鐘を鑄造しようとして果さなかつた。で、その子の惠恭王が、遺命によつて遂に成就せしめたといふのが、これである。

十二萬斤を費したといふこの巨鐘は、鑄上げられるまでには、大變な手数を要した。龜裂が出来て居たり、音が濁つて響いたりした。幾度も幾度も造り代へられた。しかし、どうしても完全には出来上らなかつた。王から始めて當事者は、考の出しやうもなく、皆嘆息するばかりであつた。ことに、鑄工の下典といふものゝ失望落膽は、非常であつた。

下典は家に歸つて、たゞ身を投げてゐた。そこへ來たのは妹であつた。彼女は切なる思を抑へて、自分の娘を人柱に立てたら、鐘が成就するかも知

れぬと告げた。

下典は驚いて、止めたが、妹の誠意に動かされた。妹の子は、赤熱した銅の沸つた中へ投げ込まれた。

鐘は遂に出来上つた。待ちに待つた靈ある音が、慶州の町の隅から隅まで響き渡つた。貴賤も、老少も、男女も、皆聲を上げて喜んだ。下典は名工として賞賛せられた。しかし、その音は、その耳にはたゞ母を呼ぶ娘の聲としか聞かれなかつた。

鐘の口径は七尺五寸、口周は二十三尺四寸、厚さは八寸といふのである。かう巨大でありながら、四面に天人が舞ひ、口帯に寶相華文が纏つてゐる。極めて優美であり、高雅である。朝鮮鐘といふのは、をり／＼見た。しかし、かやうな大きく、且つ優秀なものには初めて接した。

大鐘のまろみを傳ふ日のかけに鮮やかなるか
な華も天女も

新館の錠が開かれる。こゝに自分らは、有名な金冠を見るのである。

金庫が更に開かれた。見よ、目の前に、一個の金冠が燦然として居るではないか。

立飾には五十餘個の硬玉製の勾玉が連なり、黄金の纓絡が閃めき、爛然、煥然、相合してあたりを輝してゐる。

「どんな身分の人が著たのでせうか。」

「勾玉は日本のものだと思つてゐたのに、こゝにも早くからあるのですね。」

「金といふものはえらいものですな。ちつとも、色が變つてゐないではありませんか。」

驚嘆しないものはない。次の箱から耳飾、釧、指環など續々と現はれる。いづれも金色の爛々たるものである。

「これが寶といはれる玉笛です。」

玉管である。節をつけて巧みに竹の形にしてある。氣品の高さは云ふべくもない。

「龍王が獻じたといふのはこれですか。」

「どんな聲がするでせうか。」

恐る／＼覗いて見る。

春は逝き春は來れど人の子の藝術の花は散る
日知らざり

國すらもおこり仆れぬとこしへに亡びざるも
の今こゝにあり

佛國寺まで

博物館を出た自動車は、自分らと案内せられる諸鹿氏及び警察署長の東氏、郡衙の緒方氏とを載せて、坦途を走り出す。

古墓廢墟、見るところ故址ならざるものはない。

山は高くなくしてやゝ遠い。野は山を四圍にして潤けてゐる。新羅の都がこゝで開かれたのは、尤もとうなづかれる。しかし今の慶州は、こゝになくして西に偏してゐる。恰も奈良が東に偏してゐると同様である。たゞ奈良には、當時の堂塔が、變化を受けながらも巍然たるものもあるのに、こゝには、たゞ斷礎と廢址とが、淋しく存してゐるのが異なつてゐる。

車が停まつた處で下りる。諸鹿氏の後について、松林の中に入る。この邊にしては、よく茂つたものだ。内部は薄暗い位である。

行き抜けると、廣い芝原に出る。その中央に、圓墳があつて、こゝも芝が綠に覆つてゐる。近づけば、その周圍に護石があり、控石がある。控石の間に十二神像がある。それらが、大體毀れてゐるが、申石の衣冠した申は完全に残つてゐる。

豊かなる袂ひろげて千年まで君を蒙ふと身は
立つらしも

「これが聖徳王陵です。」

「随分荒れてゐますね。それにしても、松林はよく茂つてゐるではありません。」

せんか。」

「陵は大切に、周囲の樹も伐らない習慣がついてゐますから、これのな
くなることはありません。」

その松の茂みが陵を繞つてゐるので、武烈王の開放的なのと異なつて、統
一味が十分にある。陵の草の青さは、松の黒さに映發して、一層幽奥である。

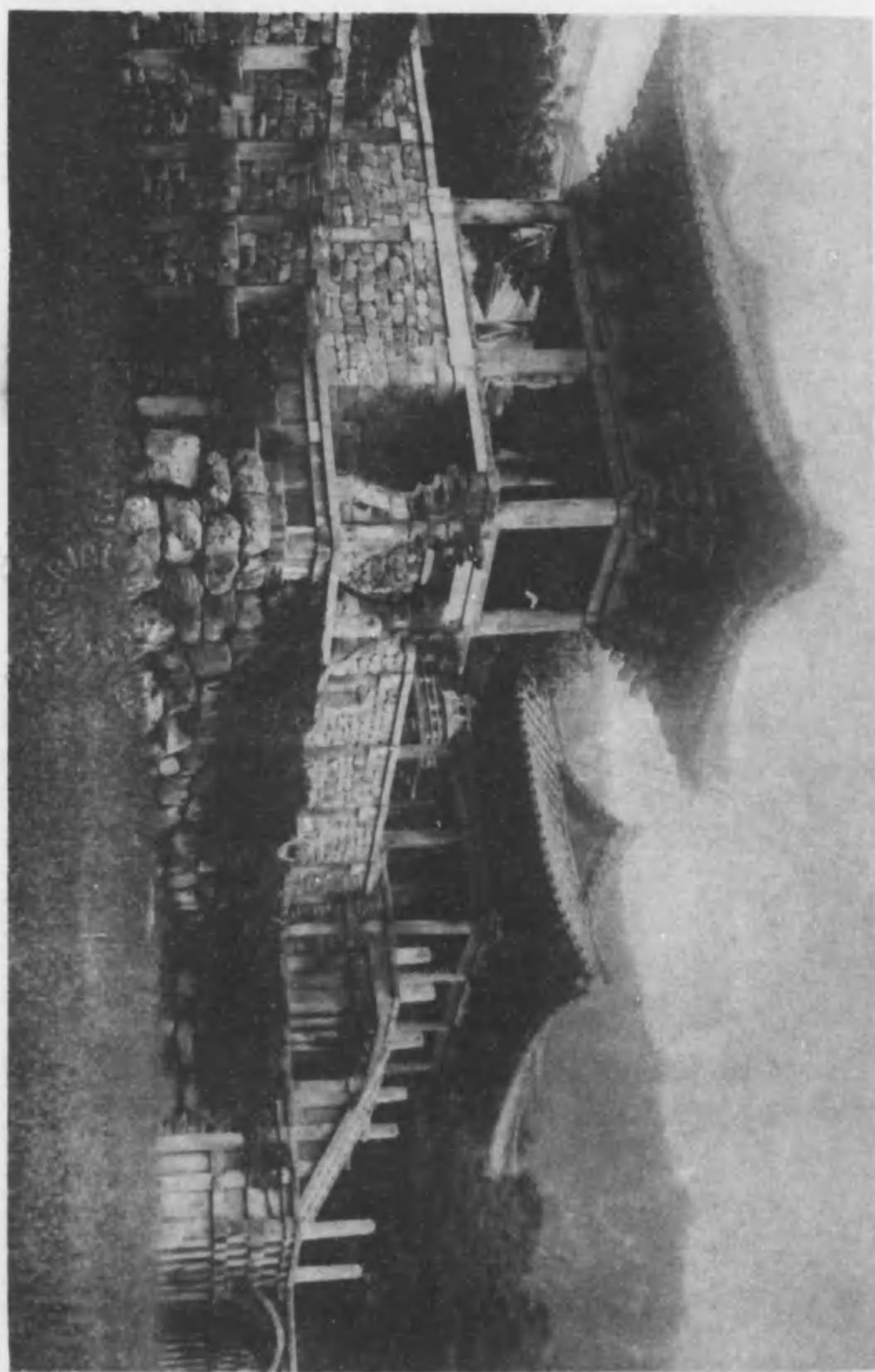
立ちめぐる松の林の深うして風も動かす陵の
上

陵を出てまた車を走らせる。こゝも同じ坦々たる途である。佛國寺驛

といふのも過ぎる。「影池があちらだ。」と聞く中に通つてしまふ。南山も
すでに遠くなつた。前途にはすでに霧がかゝり初めた。日の影は巖にの
み残るやうになつた。逢ふ人も稀になつた。鵲がしば／＼啼いて通る。
山の根に車が止まる。下りると、眼前に奇構をこらした橋が見える。塔
が見える。寫真で屢々逢つた佛國寺である。

青雲橋、白雲橋といふ奇巧のある石階が人を高く導く。

音立てゝのぼるきさはし昔人踏みにし時もか
く響きけむ



寺 圖 繪

上ると、中門がある。紫霞門と云ふ。それから廻廊が連なつて、左右の經樓、鐘樓にいたり、更に折れ又折れて、金堂の兩側に到つたのであらうが、今はたゞ鐘樓のみが存してをる。

門に入る。金堂が堂々と聳つてゐる。大雄殿の扁額が大きく仰がれる。殿前に到つて回顧する。目は自づから一基の奇塔に注がれる。

多寶塔の奇構さよ。方形の基礎の上に、方形の柱が立つ。方形の屋蓋がその上に載る。こゝまでは方形であるが、その上の三層は皆八角である。柱も、勾欄も、皆さうである。その上に載る屋蓋も八角である。しかして、その上に相輪が立つてゐる。下は四角で整ひ、上は八角でままとまつてゐる。四角と八角との對照の面白さは、建造者の奇想の無礙なのを思はしめて十分である。

目は東から西に轉ずる。そこに釋迦塔が巍然として居る。全體が方形

で、三層から出来てゐる。頂に寶珠露盤がある。多寶塔の奇構はないが、安定の感は確かで、しかも優美快暢の趣を持つて居る。

「これ等は實際新羅人が作つたのでせうか。」

「さういふことになつて居ります。が、影池の傳説によると、さうばかりでもなかりさうです。」

「影池といふのは、道で御話があつたあれですか。」

「さうです。唐から來た工人の妻が寺に這入れないので、夫の作つてゐる釋迦塔が出来上つて、水に映つるのを待つてゐたが、それが映らなくなつて、たゞ多寶塔ばかり映つたので、失望して池に投身した、といふのですから。」

「釋迦塔が唐人の作なら、多寶塔も無論ではないでせうか。」

勝手な想像を云ひあつて、殿後にまはる。講堂の趾、またその奥に僧坊の跡とおもはれる土壇がある。佛國寺は規模の大きな寺であつたのである。

而してその配置は奈良の薬師寺とよく似てゐる。

寺を抜けて左に少し下ると、また一寺がある。これにも佛國寺同様の石階がある。安養門といふ中門がある。奥に爲祝殿といふ金堂がある。ここにも、後に講堂の址があり、僧房のそれもある。全然同様の構造であつて、規模が小さいだけが異なつてゐる。この二寺が合して、今は一佛國寺となつたのである。

「石階にも、門にも立派な名をつけたものですな。」

「命名法は、支那に倣つたのでせうが、随分上手なものです。何でもないと、ところに立派な名がついてゐます。」

「しかしこゝのは、大體名と實と相協つてゐるではありませんか。」

「こゝの佛像が評判なのです。拜んで行きませうか。」

日はすでに傾いてゐる。吐含山から来る白い霧は、すでにあたりを包ま

うとしてゐる。堂の中は薄暗い。目をとめて正面を見ると、こゝに二體の佛像がある。一つは大日如來で、一つは薬師佛である。大日は銅であるが、薬師は木である。塗り立てた胡粉が著しく暗から浮ばせる。全然新しいものゝやうであるが、近づいて凝視すると甚しく古い。

「何時の作といふのですか。」

「新羅末期といふのです。」

「あまりに塗り立てゝあるので、價値を大いに減するではありませんか。」

「住職が代ると塗り直す、といふのを聞いてゐますが、こゝのもさうでせうか。」

「佛様が新しく見えると、御利益も倍加するといふ心持もあるのでせう。」

「さうでもありませんまいが、機運を新にするといふ氣持はあるでせう。」

暮色がいよく迫つて來た。西の七寶橋、蓮華橋といふのを履んで下り

つゝ中門をふりかへつて佇む。

のこりぬし階の白さもまぎれつゝ山青黒く暮
れてゆくかな

吐含山

旅では目が早く醒める。佛國寺ホテルの縁に出てみると、魚袋君も来る。妻も来る。

緩やかな傾斜を有つた前面の廣原は、處々に蔭を見せながら、朝の明るさを含んでゐる。その間に通ずる曲折の多い一條の道は、昨日車を駛らせたところで、佛國寺驛と思はれるあたりに、白い建物らしいのが一つ見える。遙か向うに、壁のやうに立つて居る一帶の山には、雲が白く搖曳してゐる。が、それは主に中腹以下であつて、朝鮮特有の赤禿を現はにして、頂には朝日の光が鮮やかにさしてゐる。

「あれが南山でせうか。」

「さうだと思ひます。」

「随分よく禿げたものですな。石山寺から田上山たにがみを見るのと、一寸似てゐますね。」

「禿げたのが惜しいですな。あれが鬱蒼としてゐたら、どんなに立派でせう。」

「新羅の盛んな時には、十分茂つてゐたのでせう。」

「左手の方に見えるのは、えらい岩山ですな。」

「特に名は聞きません。赤土が雨に流れて、いはゆる山骨稜々となつたのです。京城のうしろの北漢山も、あんなものです。」

旅といふほどの旅にもあらなくにおどろき易くなりぬ心は

食事を済ませて、自分と妻とはチェアに乗る。藤椅子に二本の棒をつけて、二人で昇るのである。箱根あたりで見て、變なものだと思つた。しかし乗つて昇がれて見ると、ゆさ／＼とする具合決して悪くない。たゞ馴れないので、やゝ不安である。

佛國寺を左にして、すぐ山路にかゝる。山は吐舎といふ。石窟菴といふのを見ようとするのである。道の兩側には、丈の低い雑木がまばらに生えてゐて、極めて平凡な道である。

谷に添うて、道は曲り曲りして上る。内地ならば、人足と何か話しつつ行くのであるが、語が通じないから、すつかり沈黙である。それだけに進行は早い。谷に来て小さな橋を渡る。

右手にも谷がある。その向うに小家が一つ見える。チェアーの上から、追いついた魚袋君と話す。

「よくあんなところに住まれるものですか。」

「あすこから、下の田でも作るのでせう。」

「あの田には、水の引きやうがないではありませんか。」

「この邊のは、水があると作るがなくなればそのまゝで枯らしてしまつても構はないのです。」

「昨夜の話では、こゝに虎が居るといふのでは、ありませんか。」

「居ても、こゝまでは来ないと極まつてゐるのでせう。」

「來たら大變ですな。鐵砲の用意もなかりさうです。」

「昔の人のやうに、舌でもつかんで殺す積りでせう。」

昨宵の話では、この邊に虎が居るのである。この正月に、虎の子が三疋遊

んでゐたのを、諸鹿氏は確かに見られたのである。それから八月目の今日、それらが、よほど生長してゐなければならぬ。それを知りながら、安閑と住んでゐるのは、何故であらうか。

虎よりもいみじきものゝ世にあればこの荒山
に人の住むらし

日は明らかにさして、暑さは中々であるが、雲が風のまに／＼動いて、木立のうへに蔭をつくつたり、また下つて枝を纏つたりする。明るさと、暗さと、緑と、白と、おもしろい交錯を見せる。

「カマニ、カマニ。」

「ゆつくり、ゆつくり」と、鮮語の分る魚袋君が、注意しつゝ人足と話すのを譯されつゝ聞く。

「虎は居るのか。」

「居ります。」

「何處に居るのか。」

「あの谷のところですか。」

「こゝから三つめの谷か。」

「さうです、あすここに居るのです。」

云はれて見るが其處までは、此處から數町の隔たりがある。谷といふよりも罅目といふべき浅いものが、間に二つあるのみであり、上るに従つて、その罅目もいつしか消えてしまつて、頂はたゞ一續きの平地になつてゐるら

し。

「あの谷から、峰にはすぐ出られるではありませんか。あの峰を、私たちは通るのでせう。」

「日中ですし、かう多人勢では、とても來られないでせう。」

自分らは一行四人、人足と昇き手が四人、手かはりが二人、同勢十人である。これでは、虎もよほど餓ゑなければ、向つては來られまい。

たうとう頂に出ると、腰掛が置いてある。鮮人の女が一人サイダー、果物などを賣つてゐる。子どもがゐる。それに菓子を遣ると、別に辭儀もしないので、女が叱る。

こゝから例の谷へは平地續きである。しかし居る人は、何とも思はないらし。

「こゝから日本海が見えるのですのに、今日は惜しい事です。海からの日

の出は、とても立派です。」

向側、乃ち日本海に向いた方には、雲がことに厚くかゝつてゐる。その方の谷へは緩い傾斜であるが、例の矮い樹ばかりが見えて、大體は草山である。日は中々暑い。休んで風を待つてゐると、前を自転車をかっいで通る人がある。鮮人かと思ふと内地人である。

「何處から御出ですか。」

「慶州から來ました。」

「急用ですか。」

「商用です。この山の下に製氷會社を作るので、こゝを殆んど毎日越して居るのです。」

シャツを浸した汗は滴をなしてゐる。

安けさを貪りながら行く群に恥ぢよと落つる
人の汗かも

自分らの話で、その人は一寸休んだが、また自転車をかっいで黙禮して下の谷に下りて行つた。

左手の山はまだ高い。人足がチェアを上げる。

「山の上まで上らせませう。」

と魚袋君がいふ。雲と前後しつゝ、チェアは斜になつて上り初める。灌木の枝と乗手の肩は摩れ摩れになる。暫くすると絶頂に出る。みんな下り立つて、整つて四方を眺める。下の谷の深さが見える。南山をかけて

の野の廣さが見える。雲のちぎれが頻りに飛ぶ。それと共に木草の緑が浮動する。天はよく晴れてゐる。その碧から風は吹き下りる。

日の影をさゝせ曇らせ高山は雲のゆきゝのほ
しいまゝなる

人足らも嬉しさうである。その一人が何かつかまへて自分らに見せに来て、何か云ふ。

「何と云ふのですか。」

「これは、何と云ふ蟲かと云ふのですが、たゞ普通の蜥蜴の子ですよ。」

「話の種がないから、あんなものを愛想に持つて来るんですよ。」

「可愛いところがありますな。東京では、よく鮮人の人殺しがあつたりして、何だか恐いものゝやうに思はれてゐるのですが。」

「そんなのが、遠方へ嫁ぎに出るのでせう。」

雲は絶間なしに飛ぶ。その行方を趁うてふりかへると、一道の光が見えて、それが輝やかに動揺する。

「日本海が見える。」

海だ。雲が下を行くので、自づから波の光が高く目に映るのであらう。

輝ける廣幅生絹一筋は海といふべくあまり白
しも

危い崖を昇きおろす。寺の屋根が脚下に見え出す。

「いよ／＼来た。」

「石窟菴だ。」

嬉しさうにいふ。遂に石窟近く下される。

雲は散り盡した。窟のあたりは、木も草も光つてゐる。道さへもこゝは美しい。清水の音がきこえる。

すぐ窟に這入る。石窟といふよりも、石室といふ感じがする。支那の眞似をして、眞の石窟を作らうとしたが、然るべき岩山がないので、山腹を切つて、まづ佛像を安置し、四壁を石で疊み、天井を石で張つて、その上に土を被つて、石窟に擬したのと見える。

正面の佛の前に立つて稽首するよりも、まづ仰ぎ見る。丈六の釋迦佛は慈眼を開いて、我等衆生を見下してゐる。端正な、秀麗な、柔和な面相から、無限の懐しみと愛とが湧き上る。仰いだ眼は、流れるやうな衣文の線と共に動き下る。跏趺した下の八葉蓮華は、確實に巨大の像の重みに堪へて、猶餘りを示す。

曲り入る光を受けて洞ふかく佛はいますふく
よかにして

横に廻つて更に仰ぎ見る。頬のふくらみと、肩の圓みとが、一層あざやか

に、且つ柔らかである。

「どうも立派なものですな。」

「これが、石かと思はれる位ですな。」

「よくこんな柔和に出来た事だ。」

「東洋第一といふのも、誇張ではありませんまい。」

前から知られてゐたのですか。」

「郵便脚夫が見つけたといふ話があります。」

にこやかにおはせる見れば御佛はこゝを寂し
と思さざるらし

老僧が一人這入つて来る。妻が一つ覺えの鮮語で、

「シヤジン、チョココン、ベキブスタ。」

といふやうなことをいふと、立ち留まつて佛とともに寫眞に撮られる。

一巡廻つた眼は四壁に注ぐ。と觀音を中央に、羅漢像、菩薩像が左右に陽

刻せられたのに出會ふ。

「觀音も立派ですが、この菩薩はどうでせう。」

「この衣文のしなやかさは、非常ではありませんか。」

「格好のいゝ事は、全く希臘あたりのものゝやうですな。」

「こんなのは、見た事がないやうに思はれる。」

「どうもいゝものですな。こゝまで上つて來た效が十分ありますな。」

風吹かば霞となりて棚引かむ佛の御手にかけ
ませる御衣

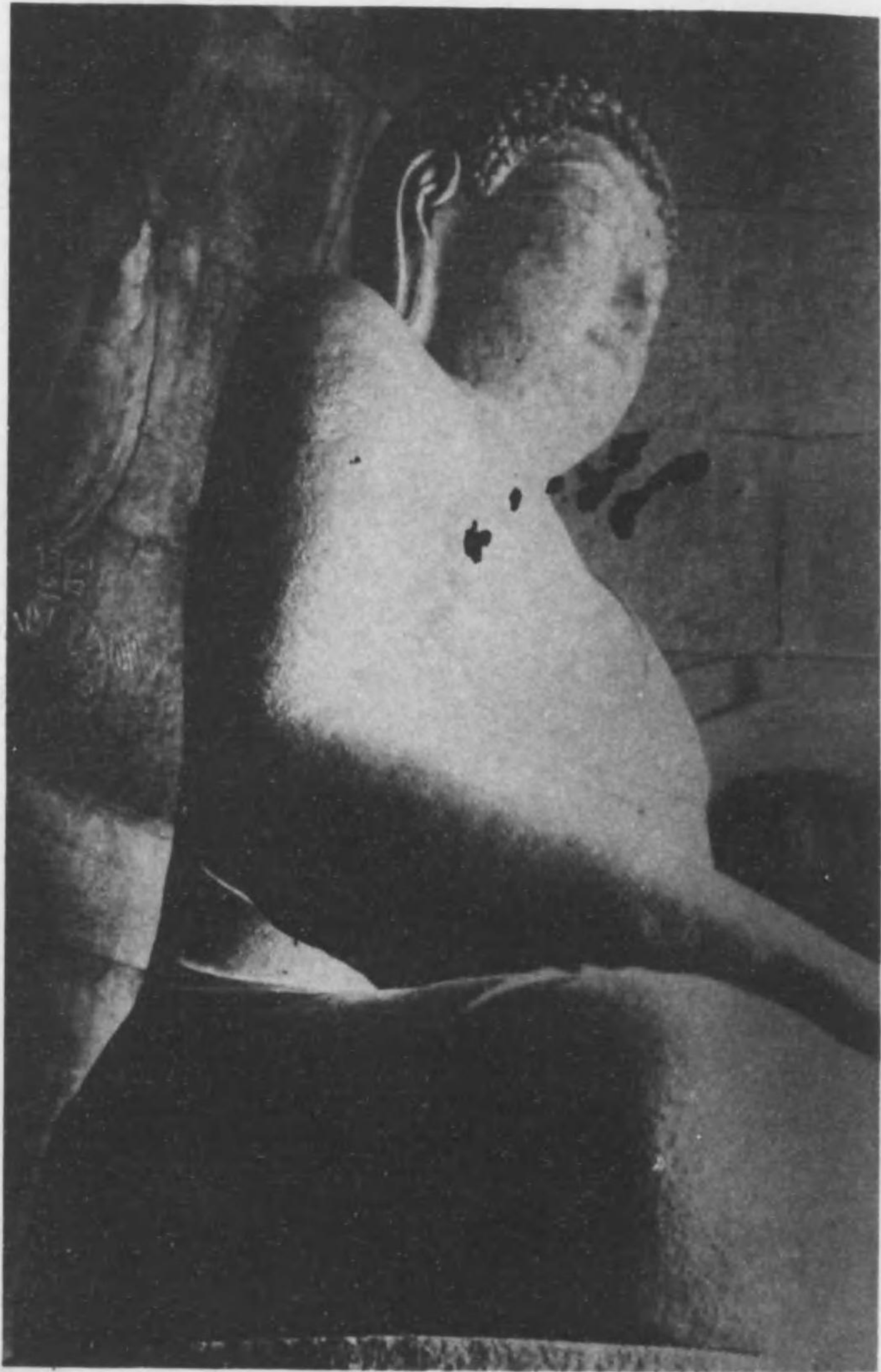
更に見上げると上にまた小佛龕が乗つてゐる。猶見上げると天井に出逢ふ。中心に蓮瓣を有つた大きな穹窿形が豊かに頭を被つてゐる。

「面白い意匠を考へましたな。」

「景德王の時に造つたといふのですが、進んだ時代だつたのですね。ちやうど天平附近に當りますかね。」

「天平も立派だが、この石のがありますまい。」
妻がまた寫眞を撮す。

窟を出がけに氣付いて、心から改めて稽首する。窟は谷に向つて居る。



石窟庵石佛

左側の崖に寺の屋根が見える。山上から見えたそれである。その谷を透して、木の山、草の山が細かい巖をつくつて連なりつゝ、遙に遠く、遂に霞の中に入つてしまつてゐる。

清水の音が極めて近い。魚袋君が下りて飲む。

「これが透乃井とか云ふのでせう。」

「脱解の時、順々に飲まぬと飲まれなかつたと云ふのです。」

「長幼有序を、水までが教へるといふのは、不自然な作り話ですな。」

「儒教からのこじつけはいやですね。」

岨を下りて寺に這入る。すでに歸つた老僧は、語の通ぜぬためか、黙つては居るが、いそ／＼として黙待してくれる。上り込んで經を見たり、佛を拜んだりする。

「あ。」

と魚袋君が立ち上る。

「何ですか。」

「ピンデです。」

南京蟲の何たるかをまだ知らぬ自分も、妻も逃げ出す。這つて居た譯ではなく、死んだのを、一つ見つけたのであつた。

「風聲鶴唳と云ふ譯ですな。」

「それにしても、何處かにゐて、とつつくと大變ですから。」

虎よりも大變なものに驚かされたのである。

チエアーが来て待つてゐる。自分と妻とが乗る。忽ちにして下りになる。飛ぶやうに早く走る。

「カマニ、カマニ。」

と呼びつゝ、魚袋君等が逐うて来る。

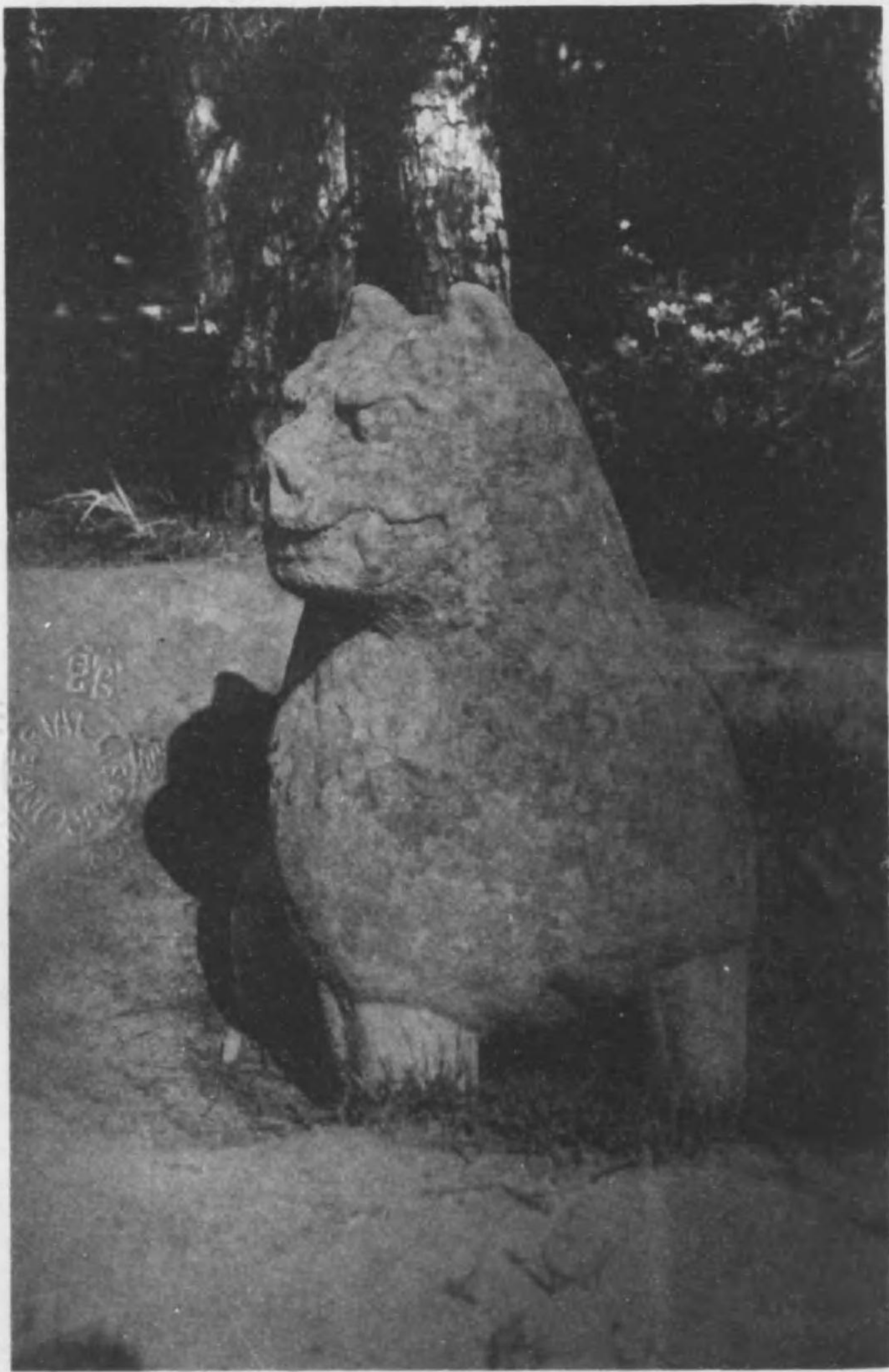
古陵古城

佛國寺を出た車は、昨日來た途を一散に走り歸る。窓から入る風が、夏の爽やかさを持つてゐる。佛國寺驛を離れると、途は左に轉じる。轉じて更に轉じると、黒く茂つた松林が近う見え出す。

車が駐まつたので下りると、諸鹿氏が先立つて、林の薄暗い中に分け入る。それに續く。下葉の露が冷たく顔に觸れる。出てしまうと芝生が青い。

芝を履むと蟲が飛びたつ。と見れば、前に敬しく侍立してゐる石人がある。一方は文官、一方は武官で、苔の華が白く點してゐる。更に二對の石獅がある。墳を守る勢雄々しく蹲つてゐるが、後の松の黒みが濃いので、浮き出て見える。

芝に被はれた圓墳は、基邊に十二神將を陽刻した護石をもつて居る。周



掛陵石獣

園の石欄は毀損もあるが、他は殆んど完全に近い。
「柩を石の上に掛けて、水の中に葬つたといふのは、何か根據があるのでせうか。」
「古くから掛陵といふから、何とかあつたのでせう。」
「何王の陵といふ決定があつたのでせうか。」
「まだ何とも決まつてゐないのです。」
墳の周囲を繞つて見る。芝に置く露もない程のからりとした天気である。空を仰ぎ、また墳を眺めると、明るい心地と、暗い気分とが交錯して来る。

石の人石の獸にまもられて安らかならむ王の
ねぶりは

その名だに知られぬ墳となりぬれど王は王に
てなほあるものを

立ち圍む松のしげみを境にて墳にひたさす日
影のあかさ

陵を出て舊路を走る車は、走りつゞけて、土城のやうなものゝ下で止まる。
下りて傾斜した路を、諸鹿氏について辿りつゝ上つて行く。

傾斜は急でもなく、且長くもない。少し上つたが暫くして上に立ち得ら
れた。

「こゝが月城の址です。外圍で土城といひますが、石壘であつたのです。」
汝川に添うて半月形に作られたもので、東西十數町南北數町の丘陵をしてゐる。ふり返ると、禿げた南山がこゝを守つてゐるやうに聳立つてゐる。

そのかみの光を受けてあらはにも木もなき山
のなほも立つかな

「神功皇后が目ざゝれたのはこゝでせうか。」

「景行天皇頃の築城といふのですから、その譯になるでせう。」

「皇后が御凱旋の時、御立てになつた杖が生えだしたといひますから、その

竹の裔も、何處かにありさうなものですな。」

「それは分りませんが、新羅王が逆さに流れても誓は渝へないといつたありなれ川は、関川のことと思はれるのです。」

「ほんとに、鴨綠江にしては、あまりに遠方過ぎるでせう。近いものを誓の種にするのが自然でせう。」

かしこめる王^ミを下にゆたかにも笑み立たしけ
むわが大后

その昔、こゝを所有してゐたのは瓠公であつた。吐含山から遙かにこゝ

を望んで、形勝の地と思つたのは脱解であつた。脱解は略取の策を考へて、近く来て消炭を側に埋めて、瓠公に「こゝは自分の先祖の所有地であるから返せ。」と迫つた。瓠公は驚いた。「もとから自分のものである。」と抗辯した。しかし脱解は「祖先が鍛冶屋で、こゝに居たが事があつて、暫く他國に立つた。その間に横領せられたのである。その證據には、地に消炭が埋つてゐる。掘り起せば、すぐ現はれる。これほどの確かな事はない。」と主張した。掘らせて見ると、果して消炭が澤山出た。で、しかたがなくつて、瓠公は遂に去つた。脱解がこれに代つて住んだ。それで、こゝが自然に城廓となつたのだといふ。

「こゝをよく掘れば、まだ消炭があらはれる譯ですな。」

「氷庫に這入つて見たら、あるかも知れません。」

笑ひつゝ、壘を下ると、大きな穹窿形がある。これが石の氷庫である。精

細によく花崗石を積み上げたものである。新羅時代のものであるが、屢修築したのだといふ。坂になつてゐる道に注意して行くと、中から出て來た人がある。

「や。」

と挨拶をして顔を上げると、天井の石に頭を打ちつけた。

「これは。」

と云ひつゝ、微笑して出て行く。で、頭を打たぬ用心をして奥まで這入つて見る。

「中々廣いものですな。」

「用石の角數一千個以上と案内記にありますが、さうらしいですね。」

出ると、汚ならしい鮮童が、何か云ひつゝ近づいて來る。手にしてゐるのは、土器の破片や、瓢のこはれや、此處の發掘物である。「買つてくれ。」と云ふ

のである。

身を盡くし築きし土を掘り分けて得たるもの
賣るその祖の子は

土壘に立つと、歴々として川が見える。林が見える。池が見える。塔が見える。臺が見える。川は西川と北川と、林は遠いのは論虎藪、近いのは鷄林。池は雁鴨池、宮殿はこゝにあつて、これは園池のなごりであるといふ。塔は芬皇寺の塔、臺は瞻星臺である。

「鷄の林に風たちて」といふ軍歌をよく歌つたものですが、その鷄林があ

れなんでしょうか。」

「さうです。黄金の櫃が樹の枝にかゝつてゐて、鷄が頻りに鳴いてるのを、狐公が見て王の脱解に話す。脱解がそこへ行つて、その櫃を開くと童兒があらはれた。それが金闕智で、金氏の先祖だといふので、神聖の林となつてゐるのです。」

「樹はどんなのですか。」

「槻や、槐や、榎などですが、よく茂つてゐませう。中に、由來を書いた碑があります。」

「向うの論虎藪も、よく茂つて居るやうですな。」

「あれも保護林ですから。金現といふ男が、虎の化けた女と契つた。虎を殺せば、賞を得て出世が出来るところから、女がその本身を現はして男に射られて、出世の助をしたといふ處です。」

「うまく作つてありますな。さし向き馬琴ものですね。」

「虎が人に化けたのも妙ですね。南洋にもそんな話があるさうですが。」

「しかし、人虎傳のやうに、人が虎になつたよりも自然でせう。」

「瞻星臺は、頭が傾いてゐますな。」

「それが話なのです。新羅が減んでから、寂しさに堪へかねて、瞻星臺は芬皇寺の塔と、あの雁鴨池のところまで、夜になると出て行つて、夜明まで昔話をしたので、あんなに傾いたと云つてゐるのです。」

「古い國に相應した哀れな話ですな。」

年ながき榮にしあればおもひ出でて語る言葉
の盡きむ日あらめや

城の下から出た車は、道を轉じまた轉じて、土塀のあるところで止まる。下りて見ると、大きな立木がある。螺旋に繞つた溝がある。これが鮑石亭であるといふ事がすぐ知れた。

「こゝで、代々の王が曲水の宴をしたといふのです。」

「どこから、水をこの溝に流し込んだのでせう。」

「高低もあまりないやうですが、うまく觴が流れるでせうか。」

などと云ひあふ。

溝は短徑約十五尺、長徑約十九尺もあるといふ。あちらこちらに、みんな立つて見る。

「こんな位置に、みんな座つたのでせう。」

「船が廻つて来るまでに、何か出来なければならぬとは大變ですな。これでは、すぐに廻りさうにおもはれますな。」

「それよりも大變は、後百濟の甄萱が侵入して、こゝで景克王を殺した事です。」

「百濟からこゝまで這入つて来るのを、少しも知らずにゐるといふのは、信じられませんね。」

「朴氏を倒さうといふので、金氏が内應をしてゐたのでせう。甄萱がすぐに金氏の後を立て、歸つてゐるのですから。」

「王や妃嬪達が、この狭いところで一度に殺されたのは、何といふ悲惨な事です。」

うち亂れ花も血汐も散りにけむ流れよどめる
船の上に

人々は皆悵然として立つ。

木の間の日はだん／＼西になつた。慶州を去る時間が近づいて来た。

景福宮

じやんじやんと蟬が啼く。

「蟬も違ひますな、内地のとは。」

「どう違ひますか。」

「内地のは澄んできこえますが、こゝのは濁つてゐます。ちやうど、烏と鶺鴒との聲の違ひと同じやうです。」

「そんなにも思へませんが、さうですかな。」

と感心したやうに、市山君がいふ。

暑い朝日が窓から遠慮なしにさし込む。

「随分暑いすな。」

「東京とどうですか。」

「こゝの方が暑くはないでせうか。」

「御馴れにならないので、さう思はれるのでせう。出かけませう。」

「いくら暑くつても出なければなりません。見物に來たのですからね。」

同勢は、例の三人と、こゝの河野さん、土居さん、市山君、井上君。三人の中でも、魚袋君は、すでに京城通である。であるから、田舎ものは自分等夫妻ばかりである。

「ほんたうに御苦勞様ですな。御暑いのに、御存じになり切つたところを。」と心から云ふ。車が早いので、いくらか涼しい。總督府の傍で下りて歩き出す。すでに景福宮の境内である。

右手に大きな高い門が峙つてゐる。

「あれが、光化門です。もとは宮殿の正面にあつたのですが、移されてあすこになつたのです。」

「中々いゝ形ではありませんか。」

「南大門よりも、位地がいゝためです。」

「宮殿は左手にある。廻廊が四方を圍んで、前に大門、後と左右に、小門が開けてある。這入り込むと、

「あら、こゝの草は四角に生えてゐる。」

といふ人がある。

敷石と敷石との隙間に生えてゐるのである。

「よく同じやうな丈に整つたものですな。」

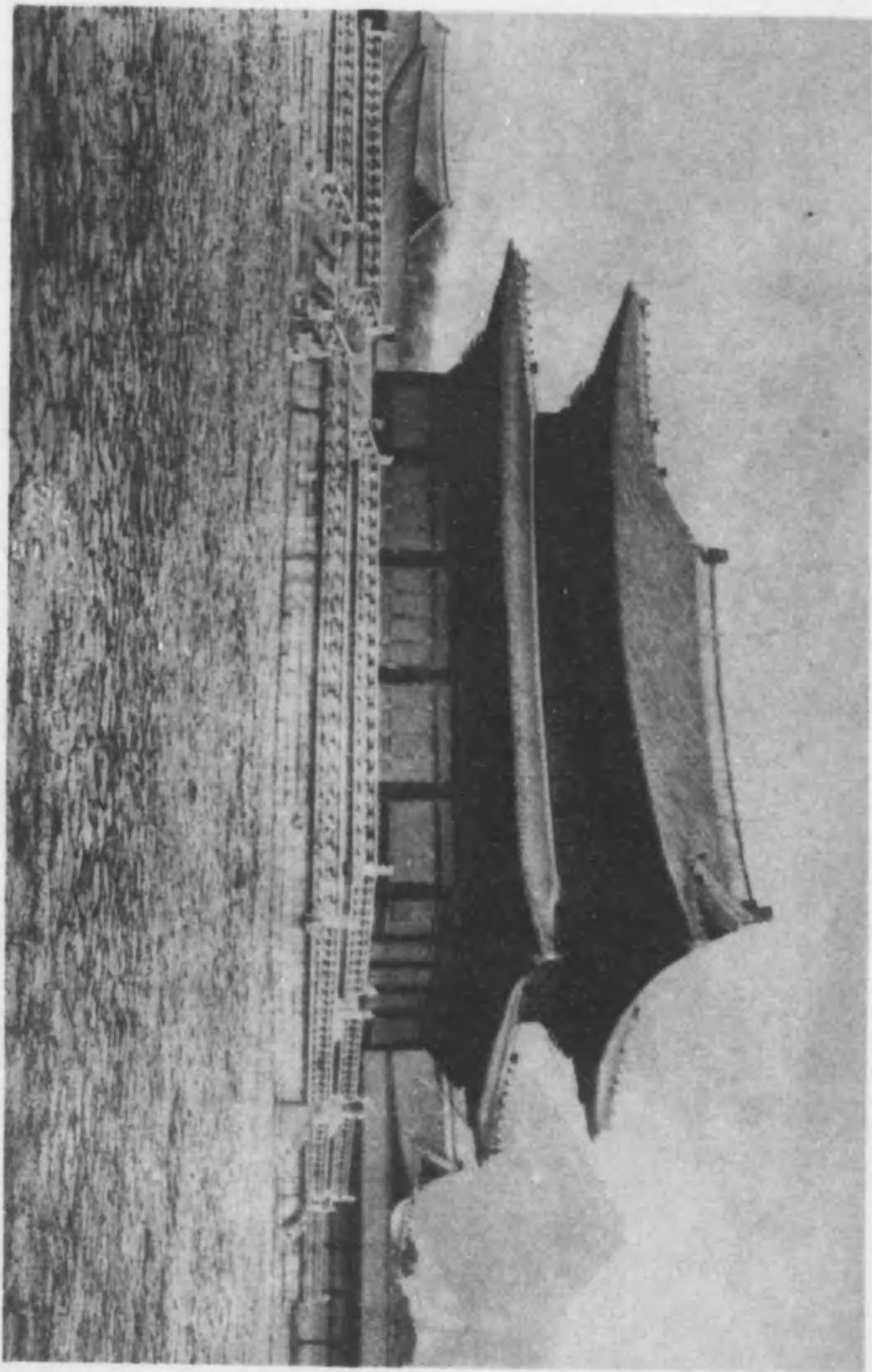
と他の人々がいふ。

「廻廊内と宮殿との間は、敷石が立派に出来てゐる。それに下り立つと、隙間隙間の草が、殆んど膝にまで達する。それを分けつゝ進めば、野を通るやうな感じである。」

石にしむ光をつよみ古宮の庭の高草露もあ
ざり

掃ふべき人しなければ伸び切れる夏草の末は
皆白けたり

勤政殿と云ふのが、この正殿の名である。二重の基壇が先づ目に入る。五間四方の重層の大建築が心を驚かす。櫓は太い。櫓は高い。鴟が一羽、つと長い尾を引いて、奇異の聲を上げて飛ぶ。



勤政殿

正面に廻つて見る。位階に従ふ廷臣の列立の大理石標が立つて居る。

出でませる王を畏こみ草の如並み伏しつらむ
まへつぎみだち

石階に行き當る。二層になつて居る。それが三つに區切られてゐて、怪物がその區分になつてゐる登桁石にゐる。双鳳雲文が中央の板石にある。踏んで上ると森嚴の感じが頻りに湧く。

殿内はがらんとして居る。が見よ。正面に寶座がある。その四面に珍奇な勾欄がある。背面に五山日月の圖の大屏障がある。その前に彫刻し

た後屏がある。仰ぐと、無数の斗拱が、五彩の色鮮やかに、群がり出、疊み上つてゐる。

「千手観音の手とも云ふべき有様ですな。」

「よくもこんなに澤山作り上げたものですね。」

「辛棒強さに感心しますね。」

「単調は、威厳をつけるにはいゝでせう。」

靜かに殿内を巡つて見る。こゝで朝觀の儀式があつたさうである。

乏しくも日さす隈々塵みえて音一つなし殿の
大床

後の門から出ると、小殿が三つ四つある。修政殿と云ふのもある。更に進むと、多数の底部三尺角大の石柱に支へられて、水に臨んだ大樓臺が見えて来る。

「あれが有名な慶會樓です。あの石柱は四十八本あるといふのです。」

「よくあんなに整つた石の柱が出来たものですな。高さはいくらあるんでせう。」

「十五尺あると云ひます。」

「樓の上も広いでせう。」

「正面七間、側面五間と書いてあります。」

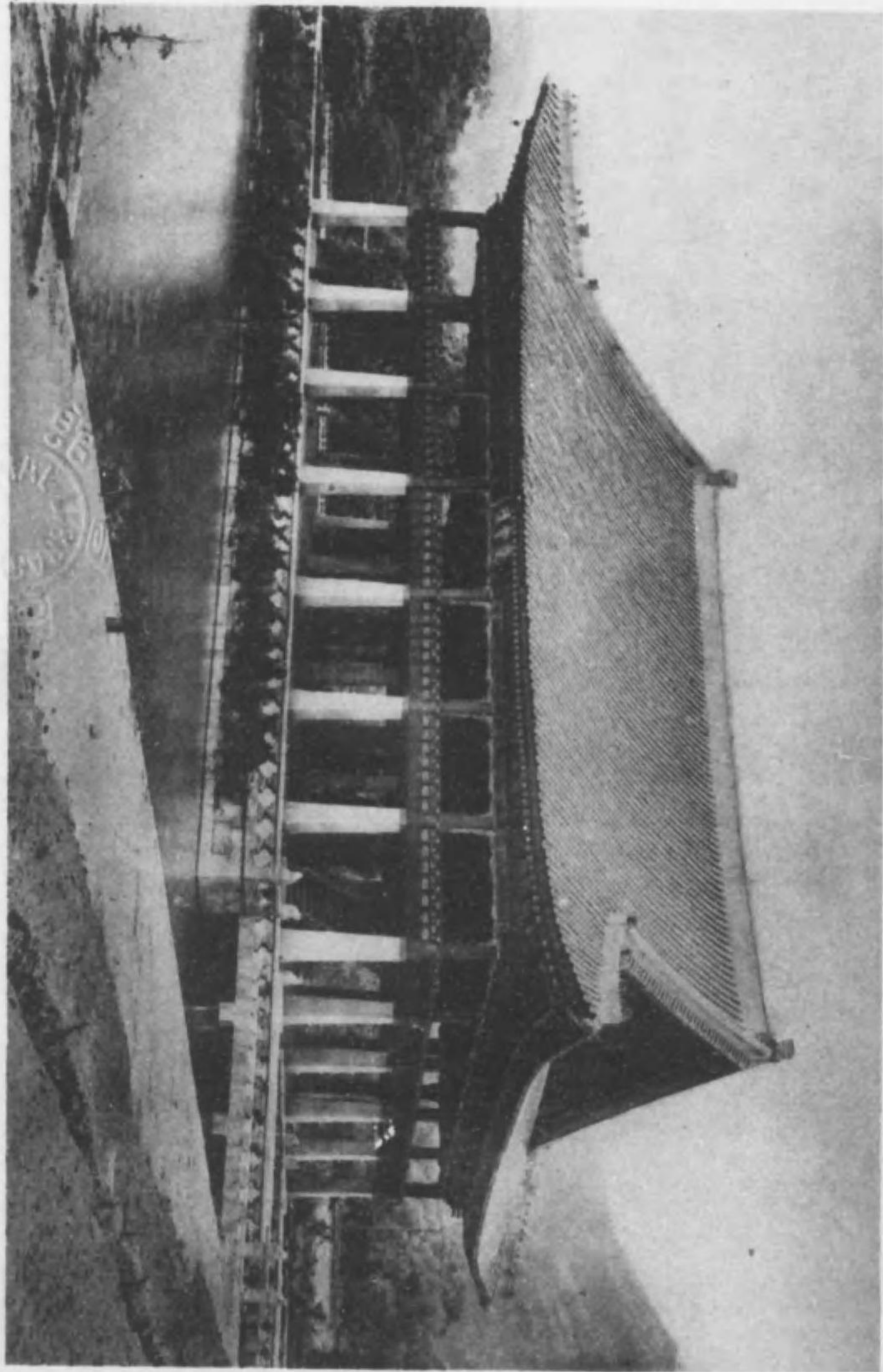
池も広い。鶯が浮んで、白を點じてゐる。それに倒に影を醜した樓臺の立派さ、美しさ。

「大院君も英傑ですな。文祿の役に焼けてしまつて、二百年ばかりも草原になつてゐた宮殿を、こんなに作り上げたのですからね。」

「しかし、民力はそのためにすっかり疲弊したといふではありませんか。」

絞られし民の血汐の色に出でばこの石柱あか
くなりなむ

後の小門を這入る。樓の並木を過ぎると、女官の居處であつたといふ小殿が二三ある。その中に立ち寄る。浅川氏の集古館になつて居るからである。款待せられる。風が涼しく通つて来る。



慶
會
堂

たはぶれに頭を載せて冷^{ひえ}をめぐ高麗焼の白の
小まくら

奥に進むと水の光が目射る。古い池である。手を入れないので、草も
木も思ふがまゝに茂つてゐる。

風の行く音はきこえぬ梢より土に頻散る槐の
花は

對岸には柳の列がある。梢が蒼い煙を叢がらせる。樓閣がその間に、一つ立つてゐる。

池とともに道は曲る。木の蔭はいよ／＼深い。また一閣が見える。最後のものである。石階の上に登る。

ふりかへると、池が長く伸びて見える。老樹の翠が重なりあつて見える。遂に後の樓門に上る。最後の門である。下には、人家が木の間に散點してゐる。そのうしろに、三角山が巍然として峙つてゐる。その左に、北漢山が奇怪な山容を示してゐる。

「すつかり晝ですな。」

「空がよく晴れてゐるので、山の輪廓が端だつてゐますね。」

「南畫の柔かさよりも、北畫の鋭さですな。」

まさやかに鋭き岩の稜みせて乾きはてたり夏
の高山

秘苑

重々と茂りかさなる木の色に緑に餓ゑし目こ
そかどやけ

實に珍しい本草の美しさである。入口からしてかうである。中はど
んなであらうか。

落合直文先生がなくなられてから、多くの歳月を経た。その時の先生は
まだ若かつた。今の自分から思へば、まだ老熟期に入りかけられたのみで

あつた。未亡人が京城に居られ、その女婿の下郡山氏が昌慶苑に勤務せられると云ふので、苑は妙に懐かしい名となつてゐた。景福宮を見終つて、自分らは、車をそれに走らせたのである。

苑の門はかなり大きい、その下に下郡山氏は立つて待つて居られた。

正面にある建物は、明政宮といふさうである。京城では最古のものだといふ。大きくはないが、古味が豊かである。見つゝ右折する。櫻の並木が、両方から枝を接するほど繁つてゐる。

「花時は大變ですよ。」

と河野さんがいふ。「内地人は、大神宮と櫻とをもつて歩く」といふ。釜山でも、馬山でも、またこゝでも大變な櫻である。櫻があつては、興趣を損ずると思ふところまで、しかも煩いまで植ゑる。そして「こゝの櫻が一番だ。」といふ。こゝのはさすがに處を得てゐて、しかも澤山ある。暑い日が枝か

ら漏れて、例の蟬が濁つた聲を張り揚げて鳴く。

茶店に休んで居ると、用事で後れてゐた下郡山氏が趁うて來られた。そして、いよゝゝ秘苑に導かれたのである。

秘苑は一般に觀覽を許されてゐない。許されても、日があり、時間がある。乃ち木曜日禁ぜられ、その以外の日も午後三時から許されてゐる。

待つて居ると、入口の戸が明く。ぞろ／＼と這入り込む。厚い芝の縁と、堆い樹木の縁と、重なつて見える。

赤坂の御苑内のやうな氣持である。道の兩側に盛り上る縁を抽いて、松の大木がすく／＼と立つてゐる。よほどの年數をもつてゐるやうなものもある。

「こゝでは、松などは陵墓の外にはないやうに思つてゐたのに、澤山ありますな。」

「作れば出来るのです。むやみに伐つては燃料にしてしまふから、なくなつたのです。」

「山の禿げたのも、そのためなんぞでせう。八十の木種をもつて歸つたといふこともあるのですからな。」

道が曲折して、前面に樓閣が現はれる。山を背にして作られてゐるので、樓の上に樓が立ち、閣の後に閣が聳え、朱楹翠臺が重疊して居る様は、内地では全く見られない光景である。階を拾うて上つて行く。

苔白き石のきさはし松の葉の亂れ降り來り畫
ぞすゞしき

樓閣を後にして立つ。

登りつゝかへりみすれば向つ丘の松より來る
風まともなり

上り盡くすと、宮殿内らしからぬ一構がある。王が官吏の實生活に觸れようとして、その通りに建てられたものだといふ。その傍の小閣は、極めて瀟灑で風情が多い。

道は下りとなる。緩い傾斜である。老樹が兩方から被ひかゝつて、涼味

が豊かである。

下りてしまうと、また一開がある。前面の芝、背面の老樹の緑に染まつてゐる。

「こゝが非常にいゝから、寫生させてもらひたいといった畫家がありましたよ。」

「こゝは撮影も寫生も禁止なのでせう。」

「さうです。さういひますと、頭の中に寫生するのは構ふまい。すこしゆつくりしてくれといつて、あれを見つめて動かないのです。永く待つて居なければならぬので、閉口した事がありますよ。」

實に自分も寫生したい氣持になつた。

奇岩のあるところに来た。

「これが薬水といふので、有名なのです。」

岩の中の小穴から、綺麗な水が湧いてゐる。

汲んで飲む。冷たさが舌に沁みて、心地が爽やぐ。限りなく岩から湧くのを直ぐであるから、「掬ぶ手の平ににこる」心配はない。

掬くびび倦うみし後のたはぶれ湧たはぶれき口くちに掌てのひらあてゝ押おへてもみつ

自分らと一處に汲む人がある。知らぬ人ながら懐かしい。

「どういふ身分の人ですか。」
と密かに問ふ。

「鮮人の官吏の一家のやうです。」

「中々品がいゝではないですか。」

「實に立派なのがあります。舉動も悠々として、あくせくしないのが理想のやうです。」

「我々のやうに匆卒なのは、下等なのでせう。」

「こゝの人から見れば、確かにさう見えるでせう。」

涼しさを語らばともに語り出でむひとつ清水
を汲み合ひし人

道が松林の中に入る。名は知らないが、白い花が處々に咲いてゐる。

「大和繪によく松の下に長い細い草を描いてありますが、こゝにはそれがありませんね。」

「ほんとに綺麗で上品なものです。内地にもあつて、古人は寫生したのでせう。」

「一體大和繪は、人物はたしかに寫生ですが、自然は實際に寫生したのでせうか。」

「何だか同じ山、同じ土坡が多いではないですか。」

「寫生をやるには遣つたのでせうが、觀察眼と筆とが足りなかつたでせう。丁度舊い歌よみが、寫生をしようとしても、眼が悪いものだから、陳腐になるのと同様なのでせう。」

道は上つたり下つたりする。遂に開けたところに出る。亭がある。そ

れから望むと市街の一部が見え、大きな門も見える。

「あれが東大門です。」

「小西行長が入城したと云ふ門ですか。」

「さういふ話です。通行不便といふので、入札になるといふ事です。」

「惜しいではありませんか。誰か趣味のある人が買つて、邪魔にならないところに建てないでせうか。」

こゝで受ける風は特別に涼しい。襟を開いてそれに浴する。幾轉しても、道は猶緑樹の間にある。

木がくれて見えこそ分かね松風にたぐひて匂

ふ花は百合らし

廻り廻つてゐる中にもとの入口に来てしまつた。惜しい事この上ない。

下郡山氏の宅は、すぐ近くである。石段を上る有様は、寺の感じである。

温突のある八疊ほどの間が客室である。落合先生の未亡人にも、下郡山氏夫人にも、二十餘年ぶりで御目にかゝる。昔の事が思はれて涙も浮ぶ。震災でなくなつたので、このごろ先生の集を編輯した事、廿九で、未亡人は先生に永別せられた事、先生の記念會を秋毎にやつてをるが、をり／＼差支へて自分の出ない事、木浦にある長男直行君の事、その御子さんが眼が悪くて、此頃までこゝに治療に来てゐられた事、服部躬治君の亡くなつた事、あれを云ひ、これ聞き、賤の緒だまき際限もない。先生の齡をとくに過ぎて、よく自

分の生きてゐられる事だ。また妻も病を毎度したが、よく今のやうにあられる事だ。しかも猶兩人で、思ひもかけぬ旅に来て、思ひもかけぬところで、思ひもかけぬ人々に逢うた事だ。猶また、未亡人が、もとの美しさでゐられることだ。

ゆくりなくまみえてさらに嬉しきはむかしの
顔に君いますこと

長安寺まで

「望軍臺が、はや見えて来ました。」

と永井君が云ふ。自動車の動揺が烈しいので、うつ向けてゐた頭を擧げると、前面一帯の黒ずんだ山々の、長城のやうに連なつて居るのが見える。

「こゝからは随分遠いので、よくは見えませんが、注意すれば、分らぬことはありません。」

と永井君は續けて云つたが、どれがどれだか、自分には少しも分らない。しかし、多少の恐怖感を含みつゝ、あこがれてゐたその山が、すでに間近く立つてゐると思ふと、心の躍らざるを得ない。

待つものゝ何かは知らず年長く目ざしゝ山の
近くなりぬる

今朝早く京城を立つた自分と、妻と、魚袋君とは、汽車でかなり暑い目にあつた。正午すこし過ぎて、鐵原に著くと、豊福君と、夫人と、永井君とが迎に出て居てくれた。この中の永井君は案内者になつて、自分らを一萬二千の奇峰を有つて、天下の名山と云はれてゐる金剛山に、導き入れようと云ふのであつた。

電車は小さい。荷物の關係で、少し遅れてそれに這入ると、先立つて鮮人の土工が多人數、すでに席を占めて居た。窓から車中に隅までさし込む日

は極めて暑い。薙の強い臭が、それに伴なつて満ち渡つてゐる。人とともに入り込んだ蠅の群は、羽音を強く立てゝ飛び廻る。やつと席を得て座ると、蠅は遠慮もなく、汗の流れる顔を掠める。

車が進み出しても、風は來ない。土工達はすぐ辨當を開いて、盛んに喫し始める。空腹ではあり、驛で買った辨當はあるが、その汚なさと、臭さとで、とても箸を取る氣になれない。しかたがないので、たゞ外面をのみ見るやうに務めてゐる。

車は畑地を通る。と思へば、荒原に來る。黒い岩が澤山ごろ／＼してゐる。荒蕪地を拓いて、岩を成るべく一處に集めたのださうであるから、その努力のほどが思ひやられる。と見れば、秋草の花が折々散らつく。急に女郎花の大群が通り過ぎる。

荒山の麓野廣み女郎花黄色なる雲の末ぼやけ
たり

また畑地が来る。日の熱と、薙の臭と、蠅の羽音とが、鼻と耳とを強く刺戟する。辨當はどうしても食ふ事が出来ない。

昌道里まで来ると、みんな下りた。自分らも下りると、自動車が待つて居るので、それに乗り込む。やつと、薙の臭と、蠅の羽音からは離れたので安心する。が、日の熱は狭いだけに却つて強い。車はすぐ動き出さうとする。

「一寸待つてくれ。こゝで辨當を食はなければ、これからはとても食はれない。」

鮮語の出来る永井君に、さう云つて暫く止めて貰つて、食事にかゝる。すぐにかぎつけて、例の蠅が群がつて来る。唇を動かして、それを拂ひつゝ、今までの空腹を短時間に満さうとするのは、まことに忙がしい。

やつと食事が済んだので、車は急速に動き出す。大邱から慶州までの坦途をどらいぶして、朝鮮の道は何處でも同様であらうと安心してゐた自分らに取つて、此道は實に意外なものであつた。屈曲はことに烈しい。それを、車でこはしてあるので、凸凹が甚しく出来てゐる。そこを丈夫なフォードが疾駆する。左に揺れ、右に傾き、前によろめき、後に倒れる。身體は大波の上の舟に居るが如くである。帽子は脱がなくては、忽ち毀れてしまふ。それを膝の上に乗せて、幾度も落ちようとするのを支へつゝ、揺めく頭を直くして、外面を見ると、又女郎花の黄色な雲が野を被つて来る。と貧しい墓を持つた小山が現はれる。黒い岩の多い荒原が続く。これが果もなく繰

り返される。

「漢江の上流にきました。」

と永井君がいふ。車は忽ち深い暗い谷間に曲り曲り下り始めた。「恐ろしい道もあるものだ。」と怖々見上げると、前面は切り立つた崖である。それも、こんな場合に、内地で普通に見る大きな一枚岩、またはその連続ではなく、富士の熔岩のやうな黒い小さな岩が、重なり重なり積み上がり積み上つて居ても、し一つが落ちれば、皆一度に崩れかゝりさうである。この不思議な小岩の大集積の上に、また黒い土の断層があり、更にその上に、多少の草と木とが生えてゐる。上まで見極めて更に見下すと、漢江の水は遙か下を、岩の間を廻り廻り、白いいさゝかの波を擧げつゝ流れ流れて、自分の車の渡るべき橋の下に来てゐる。これが京城に近く、あの大江になるかと思ふと、不思議の感がする。

對岸の崖の見る見る高まるよ谷底にまで落つる車か

橋を渡り切つた車は、また曲り曲りして崖の上に出た。女郎花の野、墓の山、荒れた原がまた来る。更に畑の多い山懐に来て、大迂廻をしつゝ山腹を上つて行く。谷間の畑の中を、長い煙管を弄びながら近道をして、「あんな廻り道をして行く車などに乗る無性者は。」と云ふやうな表情で行く鮮人の二三が見える。

迂廻し了つた車は、暫くして峠にかゝる。ふりかへると、今まで通つて來

た野も、山も一つに見える。傾きかゝつた陽が紫色に煙つてゐるので、荒涼の感じはなくなつて、すべてが極めてなつかしく見える。

赤土の色の著しい切通を過ぎて、車は盛んに走り出す。

谷に下りると、前面にまた峠が現はれる。迂廻しつゝ上る。今度のは、前のよりも高い。一層烈しい動搖をこらへつゝ上り切つて、強い下りを下りようとする。と前面一帯に黒ずんだ連峯が見えた。と永井君が聲を高くして、「望軍臺がはや見えて來ました。」と云ひ出したのであつた。

望軍臺は案内記で見ると、内金剛の最高峯である。従つて何處からでも見える譯であるが、群嶺が重疊して居るので、どれがどれだか、少しも分らない。たゞ前面一様の長城壁である。それは、強い壓迫感を起さしめはするが、この位な山彙は、内地でも旅行中出逢つたのみならず、それが特に名を有つほどの山でなかつた事も屢々あつた。で、その金剛山といふものも、案内

平凡なものだ、世界の名山もこんなものかと、意外な感が起り初めたのであつた。

車は矢の如く峠を下る。倒れかけた身を起すと間もなく、末輝里といふ村が来る。更に一高處を越える。川が沿うて走る。路は急に平滑になる。車は一層早い。

珍らしい松の列が、重々と枝を垂れ、黒々と葉を累ねて、冷やかな蔭を作つて續く。覺えず、上衣の前を合はせる。今までの暑さは、何處へか去つてしまつたのである。掛弓亭といふ、李朝の太祖が弓を掛けたと傳へる祠があると案内記にあるが、それと見る間もなく、松林は忽ち盡きる。塔巨里と云ふ小村が来る。外れる。稻田が續く。とその中から、悠々と飛び立つものがある。

「あゝ鶴だ。」

みんな一齊に叫ぶ。眞名鶴である。薄墨色の頭を長々と伸べ、同じ色の羽を悠揚と振つて、車の音に驚いたと云ふでもなく、しかし道と反対の方に飛んで行く有様は、動物園や公園ならずして、初めて見た自分の眼には、確かに驚異である。

緩やかに翼のばしてたつ鶴に夕べの稲葉末も
動かす

松林がまたつゞく。谷川が来る。さあといふ音が強く耳を打つ時、綺麗な橋が来る。また松林がつゞく。今度のは一層重く茂つてゐる。冷やか

な気が、風では無くして肌に沁んで来る。空も見えないほどの繁りの中に、坦々として一筋の道が通じてゐる。車の速度がいよゝ早くなる。朝鮮型のと内地風のと、家が四つ五つ現はれる。一轉して、車は瑞士にでもありさうな簡素な平家建の玄關に著く。これが長安寺ホテルであつた。

松ばかりでなく、こゝでは、すでに大きな縦も交つて、重い繁りを作つてゐる。身は既に、金剛山中に這入つてゐるのである。時ははや黄昏となつた。梢に残つてゐる、僅かな夕照は、極めて薄い黄色を見せて歸つてゆく鴉の群に及んで居る。朝鮮の各處で見た鴉は、こゝでは、殆んどその影を見せない。却つて、内地と同じ羽の眞黒な鴉が、同じく「かあ〜」と鳴いて、夕べの空を横切つてゐる。

「京城から電報があつたので、特に御部屋を明けて置きました。」
支配人の伊藤氏が、叮嚀に云つて出迎へてくれる。見ると、あの部屋も、この

部屋も、皆獨逸種かと思はれる人々で塞がつてゐる。廊下を狭しと往來するものも、皆偉大な體格の持主である。小石を敷詰めた長い廊下を通つて、本館から遙かに離れた一室に鞆を下す。豊福君、永井君は、別な内地風の旅館に行く。

「左様なら、また明日。金剛山の神髓といふのを一つ見ませう。」

昌道里からの自動車中、體が悪いので、俯目勝であつた魚袋君は、隣室の本間の方を占めて、すぐ寝ることにする。

自分と妻とは、西洋室の方に這入つた。窓から見ると、谷川の水の夕霧に入りかけてゐるのが白い。道に添うて、松と縦とが黒い。その間から向うの朝鮮旅館に貧しくともる燈が見える。

「食堂へ御出を願ひます。」

一浴して、餓ゑの著しい身體を食堂へ運ぶ。

人々は早集まつてゐる。ダンスがすぐ初まる。夜は極めて静かである。何の響もこゝでは聞えない。美しく、賑やかに響く音の流のみが、あたりを支配する。踊る人々は面白いであらう。廻り廻つて、飽く様子が無い。

窓に入るさ霧の中にとる火の光動かし人ら
躍るも

闇深き山の窓邊の灯に匂ふをどるをんなの桃
色の肌

内金剛

ぼつかり目を開けると、東京の家ではない。身は、昨夜からの長安寺ホテ
ルに居たのである。

呼びさます水の響に東京へ通ひし夢は山に歸
りぬ

起きて廊下に出ると、夏を外にした冷やかさである。

「この寒いのに、プールで、獨逸人は水浴をしてゐますよ。」

と魚袋君が云ふ。川の向の帷には、冷たさうな霧が迷つてゐる。
朝食をしてゐると、草鞋杖、妻の乗るべきチェアも、整つたといふ。
玄關に出る。

啼く蟬の聲ほのかなり枝繁き樅の高處たぐどに日の
すこしさし

豊福君一行が来て待つて居る。

「随分御待ちでしたか。」

「それほどでもありません。三十分位です。」

「それは失敬しました。」

と恐縮する。それに、豊福君達の旅館では、南京蟲の襲來があつたので、夜中に起きて大騒をした。まだ居るかも知れんといふ心配で、自然に早く起きられたのだといふので、また氣の毒がる。

草鞋を久しぶり履いて、實はホテルのボーイにはかせてもらつて、杖を手に、第一步を履みしめる。

昨夜、喫烟室に居ると、突然、白衣粗髯の人があらはれて來た。はじめ、かやうな服装の人を見たので、極めて異様に感じたが、その人は、

「内務部長から電報が來て、御案内をしるといふ命令ですから参りました。」と云つて、裴錦林といふ名刺を出した。この服装は僧の略装で、この人は、長安寺の人であつた事が了解せられた。

裴君は、昨夜とは異つて、今朝は白い軽い装をして、玄關前で待つてゐる。

「今日は萬事御願ひします。」

妻がチェアーが上ると、朝鮮人夫、寫眞師を交へた一行が、輕快に出立する。川に沿つて上る。樹木の茂りがいよ／＼加はつて來る。萬川橋といふ橋を渡ると、景教中國流行の碑の寫しがある。

長安寺の伽藍が見え初める。樓門、山門、本殿が、層々として相重なつてゐる。後の山容が、巉巖に老樹を交へてゐて、すでに怪奇であるのに、青や、綠や、黄や、紅を錯綜した、いはゆる彩樓畫閣が、それと巧みな調和を保つて、優に一幅を作り上げてゐる。新羅の法興王が初めて作つて、幾度か興廢の後、李朝の世祖王が再建し、更に歴代の尊信を得て、今日に到つたと云ふ。

樓門を潜つて石階を上り、また樓門を潜つて大雄寶殿の前に出る。

六殿七閣の隨一といふだけ、大雄寶殿は極めて立派なものである。飛檐朱棟、仰ぎ見ると眩ましい。

餘り汚れない草鞋であるので、斐君の案内で内陣に這入り込む。金色の佛が笑ましげに見てゐる。その上に、殆んど數を知らぬほど彩色をした斗拱が、重なり重なつてゐる。景福宮の勤政殿の様式で、單調の威嚴を思ふ。冥宮殿の前を通つて、本道に出ると斐君が、

「向うに見えるのが釋迦峯、次が地藏峯、次が觀音峯で、各その下に、庵を有つて居ます。」

といふ。

天は清く晴れて、雲影を留めない。その下に、殆んど一枚岩から成立つたかと思はれる奇峰が亂立する。凸凹の肌が日を受けてゐるので、ところどころ白く光つて見える。その裾は黒い密林に蒙はれて、全く分らなくなつてゐる。

海越えて來ししるしあり金剛の山の姿を正目にも見つ

右にあつた川が、すでに左になつてゐる。それに沿うて、坦々たる途を行く。斐君がよく語る。

「大變内地語が御上手ですが、何處で習はれたのですか。」

「京城の『カクコウ』でやりました。」

「『カクコウ』とは何ですか。」

「カクコウ」は學校であることが、すぐ解せられた。濁音を清音にするのは、この人々の癖である。

「それにしても、随分御上手ですな。」

「それほどでもありませんが、何でも差支はありません。」

「その学校の卒業生は、皆あなたの様に、僧院生活をされるのですか。」

「様々です。會社員になつたのもあり、「トウソク」になつたのもあります。」

「自分も驚いた。永井君は突然聲をかけた。」

「『盗賊』になつたのもあるのですか。」

「いや、『泥棒』ではありません。『道屬』です。」

「笑聲が、わつと一同から起る。」

「この案内は、毎度されるのですか。」

「毎度遣ります。一昨日も知事、昨日も部長、そして今日です。」

「では、『三日坊主』といふところですか。」

「ええ。」

「褓君よほど上手でも、この内地語は分らない。」

道が轉じて川岸に出る。川の水は至極綺麗で、赭色を帯びた石の上を、柔らかに流れ下る。褓君がまづ、水面に出た石の上を選んで渡る。續いて人々が行く。石は滑らかである。自分が最先に滑べる。半身が水の中になつて、手に擦過傷を受ける。御坊さんをからかつた罰は、觀面と感心する。

渡り了はる。別の一筋の水に道が添ふ。前のが百川、今度のは黄泉江といふ。こゝに來ると、右も、左も、前も、後も、皆怪奇な、見上げるばかりの大岩で、身は實に、斷岸絶壁の重圍に陥つた具合である。

道と云つても土はない。すべて岩傳ひである。朝鮮松が密生してゐる。いはゆる「金剛山の松の實」が、累々として實つてゐる。暑からぬ日光がその間を漏つて來る。知らぬ鳥が鳴き過ぎる。川の瀬音は沛然として、四壁に

反響を起させてゐる。

「この川には、魚が居ません。あちらに鳧峰といふのがあるからだ、と云ふのです。」

と襄君が云ふ。ふりかへると、向うの絶壁の突端に一段高く、鳧の形をした岩が聳立して、確かに、その川の魚をあまさじと覘つてゐる。

新羅の王子が、父王が國を擧げて、高麗に降つたのに、饜らす、こゝに遁世したといふ跡の石が、磊々として、潭の向うに見える。地獄に罪人の落ちるのが見えたといふ地獄門と呼ぶ峰が見える。青い潭と黒い崖とを見つゝ進むと、明鏡臺が眞の鏡のやうに聳えてゐる。

「驚いたものですな。よくこんな大きな一枚岩が出来たものだ。」

「これで、幅が極薄くつて立つてゐるのですから、一層驚きます。端の方は、一寸もないのですから。」

「これに、赭色がなかつたら、随分凄いでせう。」

地獄に行つて見ると、閻魔王の傍にあつた大きな鏡が、これと同型であつたといふ。

あたりには、猶午頭、罪人、使者、判官などといふ岩が立つ。名は地獄専門になつてゐるが、案外の明るさと、快さをもつてゐる。

永井君は、前年來た時の自分の樂書が、依然としてゐるので、大喜である。寄つて見はやす。

さし集ふ天つ光を、楽しみていはほの壁の中に
身は居り

すがやかに岩のさけめの草そよぎ朝の風立つ
潭の水より

本の道を歸りつゝ、少し轉じると、又百川の岸に出る。今度は前のに懲りて、案内の鮮人にみんな負つて貰つて渡る。本道は、前の續きの坦途である。鳴淵潭といふのが現はれる。瀧が白く落ちてゐる。潭が青く下に湛へてゐる。その中に、長い岩と、小さい岩とが散在してゐる。喪君、

「大きいのが『キントウキョシ』の遺骸です。小さいのがその子どもです。」「『キントウキョシ』とは、どういふ人ですか。」

「祖師と法を争つた人ですが、敗けたのでこゝに身を投げたのです。その子どもも、それに伴なつたのですが、皆石になつた。その泣聲が、今でも聞

えるといふのです。」

「『キントウ』とは、どう書くのですか。」

「『金』と『洞』と書くのです。」

と書いて教へる。例の濁音の省略だ。

「『キョシ』とは、どうですか。」

「『居』と『士』といふ字です。」

と書いと教へる。はあ「居士」の事か。自分らは「コジ」と読み習つてゐる。

これは吳音である。漢音では、まさに「キョシ」。「キントウキョシ」は金洞居士である。「洞」を「トウ」と云ふのは、また濁音嫌ひから發してゐる。

両方に巉巖が出たので、道は急に曲折する。その左側の巉面には、三尊佛が端然として立つてゐる。一丈餘もあらうが、苔が面を埋めてゐないので、鮮明に仰がれる。頼翁の作であるといふ。裏面にまはれば、小佛像が多數

刻されてある。

「キントウキョシ」が、祖師に負けまいといふので、祖師が三佛を彫る時に、一處に彫りかけたのですが、遂に後れたので、前の淵に身を投げたのです。」と妻君が説明する。よくも彫つたものだと感じしつゝ、佛前に列んでみんなで撮影してもらおう。

前面を壓する巨峰は、香爐峯だといふ。小と大とが相連なつて居るが、多少の松を峯頭に群がらせて、嶄然として聳つて居る様は、帝王の尊を仰ぐこちがする。

望みつゝ行く。樓閣が俄然として見えて来る。橋向うの一樓が先づ目に附く。丹緑の彩色が、あたりの積翠と相映じて居る。樓の側を通つて石階を上る。般若寶殿の雄大な建築がある。その後、重疊して諸殿がある。新羅時代に、表訓祖師の創建したといふ表訓寺がこれである。長安寺より

も大規模で、伽藍の様式が具備してゐるやうである。後の青鶴峰といふのが、いゝ背景を作つてゐる。すべて、山に凭り、溪に臨んで、形勝に應じて様式を變化し、色彩を調和せしめたのは、内地と異なつて意匠の妙を見る。細部に到つて甚しく揮拙であるのは、内地の精緻なものと異なるが、全體の感じは、確かにこの地方の寺が進んで居る。

静もれる山の緑に廊の朱高閣の丹の沁み入れるかな

「寶物を御覽なさい。」

と老僧が云ふので、縁に腰をかける。大香爐がある。李朝時代の物で精巧である。「二對あつた半分か。」などと餘計な事を云ふ。鏡も一面ある。祖師が日本に渡航した際得たものだと言ふ、比較的新しい日本鏡である。内地では、足利末期、徳川初期のものは、特に尊重しないのであるが、處によつて品の價値が變つて、こゝでは寶物として襲藏せられるのである。

寺を離れて、例の坦途を溪流に添うて行くと、日は次第に暑くなる。怪峯は急に迫まつて、溪が細くなる。細くなるほど水は奔馳する。が、白みを帯びた岩が、水の浸蝕を蒙つて稜角を失つてゐるので、水は奔馳しながら、怒號はしない。圓みを持つて廻り、柔らかかみを保つて落ちる。内地の噴湍急瀬とは、頗る趣を異にしてゐる。金剛山は、内外共に水はこの趣を具へてゐる。山の特色は怪奇の二字に盡きるが、水の特色は柔懐にあるであらう。

ゆるやかにめぐりめぐらひ足もとに遙けき山の
水流れ来る

柔らかかに落ち来る水かこの山のまことの心示
す如くに

ほの白き岩の反射の目に強き日影しづめて静
かなる淵

一大磐石の片方を、水が疎簾の如く瀉下してゐる。その磐上に「蓬萊楓嶽元化洞天」の八文字が草書に書いてある。袈裟が杖のさきで上を擦過しながら、読んで聞かせる。妻が急にチェアーを下りて見に寄ると、滑らかな磐面に、忽ち足を取られる。

萬瀑洞といふ名は、この邊から初まる。八潭も、こゝから上に上にとつゞくのである。

疎簾の中に圓い凹處がある。袈裟一寸頭を倒に入れて見せる。水が忽ち奔騰する。佛頭を洗つたといふので洗頭盆といふ。天女が琵琶を弾じたといふ琵琶潭、その影が映つたといふ映娥池、次々に現はれて来て、變化萬端である。

極みなき谷はた水か目を遣れば目を遣るまゝ
に廻らひ来る

峯に構へた茶店によつて、晝飯にする。前の法起峰の峻嶒の高處に、作り上げた一寺が見える。

「あれが普徳窟です。あの銅の柱を御覽なさい。あれ一本で、あの全體が支へられてゐるのです。」

永井君が自分の寺のやうな口吻で云ふ。新羅時代の建築だといふのに、よく腐らずに支へて居るものだと思ふ。

川を越して、その峻嶒を攀ぢはじめ。先導はもとより永井君である。左に曲り、右にくねつて、やうく上る。汗で身體中が濡ふ。よほど上ると、

寺は丁度自分に并行してゐる。

寺はまさに上下二棟になつてゐる。高い方に這入つて見る。老僧が一人ゐる。永井君が何か話す。襄君が何か云ふ。答は遅々してゐる。通り抜けて前庭に出る。狭くはあるが、少しの樹木がある。その端から見下すと萬瀑洞が一目である。屈折した谷間、その間を瀉下する溪流、或は碧く湛へ、或は白く落ちる。兩崖の若木と老木の青葉黒葉がそれに反映して、繪といふよりも自然であり、自然といふよりも繪である。それを離れて目を上げると前面の怪奇の峯頭は、高さを争つて天を刺す。大香爐峯がことに峻拔で、限りなく廣い一枚岩が、些かの横皺を持つたまゝで直上する。その皺の間に、青松が處々に亂立して、天風にそよぐ。

苔だにも蒸さざる岩の競ひ上り乾けるみ空秋
づきにけり

「恐ろしい處を見せませうか。」

永井君が例の口調で云ふ。導いて下の棟に下りる。廊下に立つて、一枚の縁板に手をかけてひき上げる。

「これからのぞいて御覽なさい。」

つと目を寄せて見ると驚く。例の銅の柱の眞上ではないか。圓いそれが、上から下に轟然として降りて居る。眼のせいかな、下の方は霞んで明らかでない。永く見るに堪へぬ。大抵にして蓋をしてもらつて、その上を通つて佛前に行つて一拜する。

「あの御坊さんは、この崖を上つたり下りたりするのでせうか。」
「あゝ年が寄つて、それは出来ませぬ。上つた限なんでせう。」
「食物は表訓寺から運ぶのでせう。がこの崖をもつて上るのは大變でせう。」

かくながら老い行く人は楽しからむ若き昔の
世をしのびつゝ

やつと帷を下りて、川を渡つて本の道を歸る。日はよほど高い。悠々と
して歩いて來ると、溪の響も、鳥の聲も、極めて爽やかに聞こえる。

がさ／＼といふ音がする。ふと立ち止まつて見ると、小さな縞栗鼠が、落
葉の間に餌をあさつてゐる。一疋かと思ふとまた一疋ゐる。夫婦であら
う。小さい目を丸くして、立つて此方を見る。

「あゝ栗鼠が。」

と云ふ。みんな立ちとまる。が、栗鼠は逃げようとしなない。

ふたりをれど猶寂しさに堪へざらむ山のけも
のゝ人に近づく

長安寺近くまで歸つて來る。

「妻君の御寺の方々は無妻ですか。」

「無妻といふものではありません。有妻といふのでもありません。」

鮮地の人は正直である。寺に歸つて來ると、僧達は晩餐中である。一列にならんで、大きな鉢を持つて、持つて來るのを受けてゐる。暫く立つて見る自分らを、にこやかに見るのもある。

僧坊に寄つて、この寺の菓子の馳走になる。寺の御茶も飲む。茶ではなし、何とかいふ木の芽であるといふ。

樓門を出る。白衣の女が二人、妻君を見て笑ひながら逃げて行く。

「何で笑ふんですか。」

「京城のハイカラな風俗をしてゐるので、恥かしがつて逃げるのです。」

「どういふ身分のですか。」

「あれは、運轉手の本妻と妾ですが、あゝやつと一緒に遊んでゐるのです。」

妻と妾とが融和してゐるのは、江戸時代の人情本の情趣が、再現せられたやうである。

山に雲が下りかゝつた。冷たく、涼しく、やゝ暑かつた一日は、また冷やかに暮れかゝつた。足の疲れが著しく感じられて來た。